

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第419次発掘調査報告書 —

2021

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する歴史文化遺産でもあります。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た今も威容を誇っています。姫路の城下町は、姫山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核が置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されています。このうち内曲輪・中曲輪の大半は世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され、保護・顕彰が図られております。

一方、外曲輪は江戸時代以来、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨の中核都市として、まちづくりが進められています。その一画にあたる大黒壺丁町において発掘調査を実施し、大黒町と呼ばれていた当時の町屋遺構と城下町形成直前の耕作痕跡、室町時代の区画溝や奈良～平安時代の遺構を確認することができました。ここに当該調査の成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和3年（2021年）3月

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例 言・凡 例

1. 本書は兵庫県姫路市大黒壺丁町 83 番で実施した姫路城跡第 419 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は民間事業者による集合住宅建設工事に先立って実施した。
3. 発掘調査は平成 31 年（2019 年）4 月 23 日から令和元年 9 月 27 日の期間に、出土品整理作業及び発掘調査報告書の作成は令和 2 年度に実施した。
4. 発掘調査は事業者の依頼を受け、姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センターが実施した。
5. 近世姫路城は、文化財保護法により「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地である「姫路城城下町跡」に区分されている。調査回数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。また、江戸時代の城下町についての言及には「姫路城下町」を使用している。
6. 遺構名の表記は溝（SD）、井戸（SE）、柱穴（SP）、掘立柱建物跡（SB）、土坑（SK）とした。
7. 遺構名は遺構面毎に 1 番から番号を付している。本報告においては煩雑を避けるため必要に応じて第 1 面は 1-〇〇、第 2 面は 2-〇〇、第 3 面は 3-〇〇と記載している。
8. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。
9. 土層注記に用いた色調は『新版 標準土色帳』（1999 年度版）に準拠している。
10. 本書で用いる土器・陶磁器の年代観は次の文献によっている。
肥前陶器・磁器：九州近世陶磁学会事務局 2000『九州陶磁の編年』
緑釉陶器：高橋照彦 1995「緑釉陶器」『中世土器の基礎研究』
備前焼：乗岡実 2000「備前焼播鉢の編年について」『第 3 回中近世備前焼研究会資料』
在地土器：姫路市教育委員会 2017『村東遺跡』姫路市埋蔵文化財調査報告第 56 集
姫路市教育委員会 2020『豆田遺跡』姫路市埋蔵文化財調査報告第 90 集
11. 発掘調査および出土品整理作業、発掘調査報告書作成・刊行に係る経費は事業者が負担した。
12. 発掘調査に係る現地作業は安西工業株式会社、空中写真測量は株式会社アコードが行った。
13. 発掘調査報告書の執筆・編集は、姫路市埋蔵文化財センターが行った。
14. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
15. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、下記の方々・機関より御協力・御教示を賜った。深く感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）
尾野善裕、工藤茂博、高橋照彦、新田和央、平尾政幸、大黒壺丁町西部自治会、大黒壺丁町東部自治会
歴史土器研究会

目 次

第 I 章	調査に至る経緯と経過	1
第 1 節	調査に至る経緯と体制	1
第 2 節	調査の経過	1
第 II 章	遺跡の立地と環境	3
第 III 章	調査の結果	4
第 1 節	調査区の基本層序	4
第 2 節	第 1 面の遺構と遺物	5
第 3 節	第 2 面の遺構と遺物	11
第 4 節	第 3 面の遺構と遺物	14
第 IV 章	総括	23
	写真図版	

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯と体制

姫路市大黒老丁町 83 番において集合住宅の建設工事が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（兵庫県遺跡番号：020169）に所在する。

事業者より平成 30 年 11 月 26 日付けで文化財保護法第 93 条に基づく届出があった。届出の内容に基づき平成 31 年 1 月 18 日に計画地において確認調査を実施した（姫路城跡第 410 次：調査番号 20180394）。確認調査の結果、遺構・遺物が確認されたことからその取扱いについて協議を行い、工事により遺構が破壊される範囲を対象として本発掘調査（姫路城跡第 419 次：調査番号 20190042）を行うこととなった。事業者と平成 31 年 4 月 19 日付けで契約を締結し、発掘調査を開始した。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

教育委員会事務局

教育長	松田克彦	埋蔵文化財センター	館長	松本 智 (R2. 4. 1 ～)
教育次長	岡本 裕 (R2. 4. 1 ～)			前田光則 (～ R2. 3. 31)
	坂田基秀 (～ R2. 3. 31)		課長補佐	岡崎政俊
生涯学習部長	福永安洋 (R2. 4. 1 ～)			森 恒裕
	沖塩宏明 (～ R2. 3. 31)		再任用	竹井宏文
文化財課長	大谷輝彦 (R2. 4. 1 ～)		技術主任	中川 猛
	花幡和宏 (～ R2. 3. 31)			
技術主任	関 梓			

第 2 節 調査の経過

調査対象面積は 533 m²で、遺構検出は 3 面で行った。残土置場の都合上、調査区を 3 分割して調査を実施した。平成 30 年 4 月 23 日より敷地西側南端から重機掘削を開始した。盛土直下から近現代の建物礎石等が残存しており、下位にそれ以前の礎石が良好に残存している状況が確認できた。近代及び近世整地層の下位で検出した造成土の上面を第 1 面として調査を進めた。半地下式竈や大型土坑、地上式竈等の町屋に伴う遺構を順次調査し、6 月 1 日に第 1 面の調査を完了した。その後、中世耕土上面まで掘り下げ、第 2 面の調査を行った。この面では、第 1 面で検出しきれなかった江戸時代（主に前半）の遺構と姫路城下町では初めて確認された江戸時代以前の中世耕土に伴う石組み溝等を調査した。6 月 26 日には第 2 面の調査を終了し、中世耕土を掘り下げ第 3 面にあたる地山を検出した。第 3 面では室町時代から奈良時代にかけての遺構群を検出した。それらを順次調査し、8 月 1 日に全景及び空中写真測量を実施した。緑釉陶器や文字瓦等の出土品を基に、8 月 3 日に地元を対象とした現地説明会を開催した。調査終了部分を埋め戻した後、西側部分を埋め 8 月 7 日から東半部と西端部分の調査を開始した。

東半部では、既存建物によって第 1 面の遺構は随所に攪乱を受けていたが、布掘基礎等の建物遺構を検出した。8 月 27 日には第 1 面の調査を完了し、第 2 面の調査を開始した。西端部分では、男柱と想定する大型土坑の広がりを確認した。9 月 7 日には同面の調査を終え、引き続き第 3 面の調査を開始した。西半部と同様に遺構を濃密に検出した。空中写真測量を 9 月 27 日に行い、現地調査を完了した。遺物はコンテナ 294 箱分が出土した。令和 2 年度に整理作業を実施し、本報告書の刊行により全ての業務を完了した。

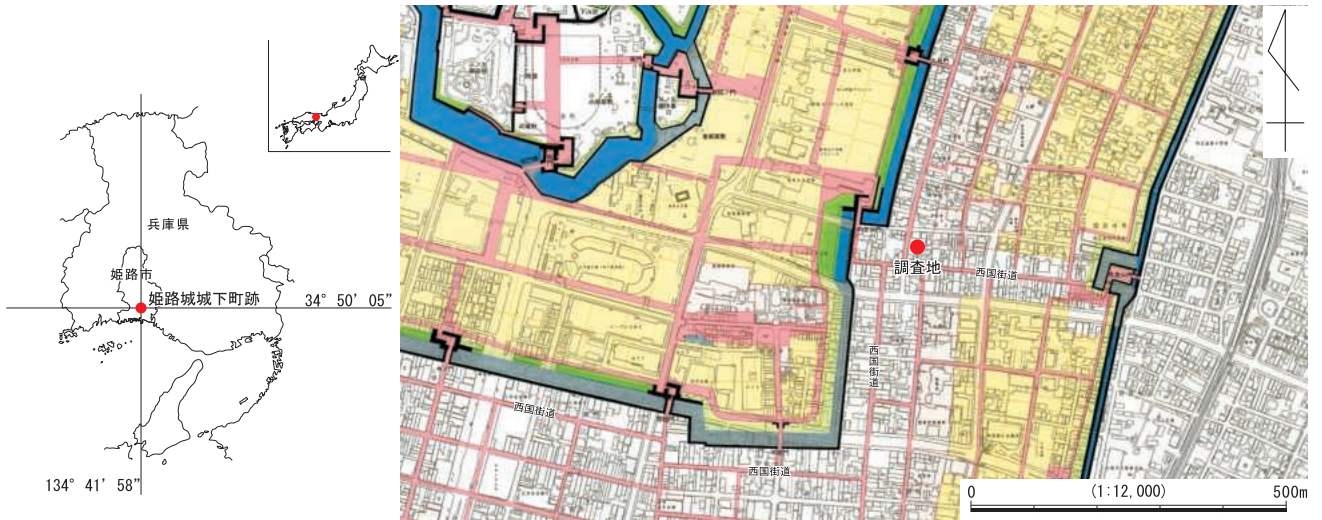


図1 調査地位置図（上図は『姫路城跡（城郭図）』に加筆・編集、下図は同図原図に第1面平面図を合成して編集）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

姫路城下町は、姫路市域を南北に貫く市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、さらに姫路を基点として東へは丹波・有馬方面へ、西へは美作・因幡へと街道が延びている。また、市川あるいは夢前川を通じて但馬・山陰地方ともつながる。海上交通路としては南側に瀬戸内海航路があるなど、陸海の交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として羽柴秀吉段階の姫路城を経て、近世の姫路城が成立した。姫路城は池田輝政により、慶長6年から同14年にかけて平野部と独立丘陵である姫山・鷲山を利用して築かれた平山城である。独立丘陵部の標高は約50m、平野部は11～15mを測る。市川の支流である船場川を西限とし、姫山・鷲山を囲うように内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされている。内曲輪には天守群など城の中核が、中曲輪には主に武家屋敷が、外曲輪には寺社地、町人地、武家屋敷等が配された。船場川西岸の龍野町や材木町等、あるいは北東に位置する野里地区を除けば曲輪外への町屋や武家屋敷の広がりほとんど見られない。姫路城下町は池田氏時代の規模をほぼ維持し、江戸時代を通じて大きく変わることなく幕末を迎えている。

調査地である大黒壺丁町は戦後の区画整理により、城の東部にあった大黒町と壺丁町が統合されて成立した。旧町の枠組みは現在も大黒壺丁町東部と西部の自治会としてそれぞれまとまりが維持されている。調査地点は江戸時代の絵図によれば大黒町にあたる。調査地の南約20mを東西に延びる街路は江戸時代の西国街道であり、調査地の西側の南北街路は西国街道から分岐した但馬・丹波方面へとつながる道である。調査地はこの街道に面した町屋にあたる。調査地の西側が町屋の間口部分にあたり、東側が裏手となる。酒井時代初頭頃と推測される『大黒町絵図』によれば調査地に該当するのは南から「又十郎持屋敷」「惣左衛門」「甚蔵」が該当する（姫路市史編集専門委員会1991）。町絵図から居住者名等は判明するものの、各家の職や屋号等を記す史料は確認されていない。ただ、調査地の北西斜向いで実施した姫路城跡第389次調査において、江戸時代前半の醸造遺構を検出している（姫路市2020）。今回の調査においても同様の遺構を検出したことから、付近一帯には江戸時代前半に醸造を生業とする町屋が軒を連ねていた可能性がある。

姫路城城下町跡の発掘調査は、これまで主として姫路駅に近い城の南側を中心に行われてきた。東側の調査は中曲輪内において学校や病院に伴う調査を行ってきたが、外曲輪におけるまとまった調査は前述の第389次のみである。そのため、城の東側の様相については不明な部分が多い。大黒町を含む当該地域は江戸時代以前には「国府寺村」と呼ばれていた。その名が示すように播磨国府ゆかりの地と想定され、播磨国府の研究初期には現在のように城の南ではなく、むしろ東側が国府推定地とされていた（木下1984）。研究初期段階では本地域は播磨国府の一角に比定されていたことになるが、昭和55年から始まった本町遺跡の発掘調査以後、研究者の視線は主に播磨国総社付近を中心とする城の南側にうつり、「国府寺村」での調査は行われておらず、長年東側における実態は不明であった。今回の調査では奈良から平安時代にかけての遺構・遺物を多数検出した。現状では播磨国府の所在地は播磨国総社周辺が有力ではあるものの、近年では、東側の平野町等で調査例が増加し、東方への遺構の広がりが徐々に判明しつつある（姫路市2017）。播磨国府を城の南側に比定するもう一つの要因として、市川の旧河道の存在が挙げられる。地形図等から城の東側には多くの旧河道が存在することが指摘されてきた（平田2018など）。しかし、こうした旧河道の多くは概ね古墳時代以前のものであり、奈良時代頃の市川については市街地に残る段丘崖の位置と発掘調査成果により調査地から東へ約0.6km付近にその西岸があったと考えられる（姫路市2021）。こうした点から、播磨国府の比定地は本町遺跡周辺のみでなく、近世の姫路城下町に重なる広い範囲を対象に再考する段階にきているといえる。

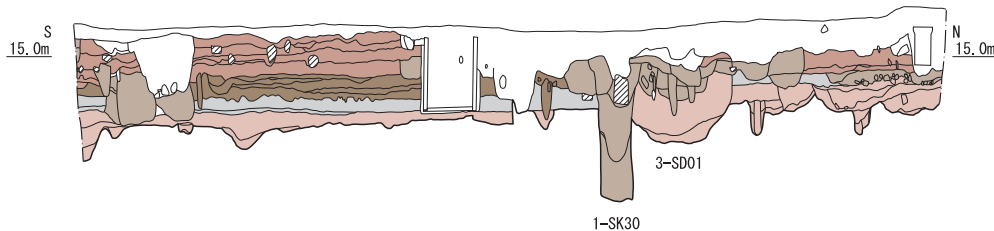
第三章 調査の結果

第1節 調査区の基本層序

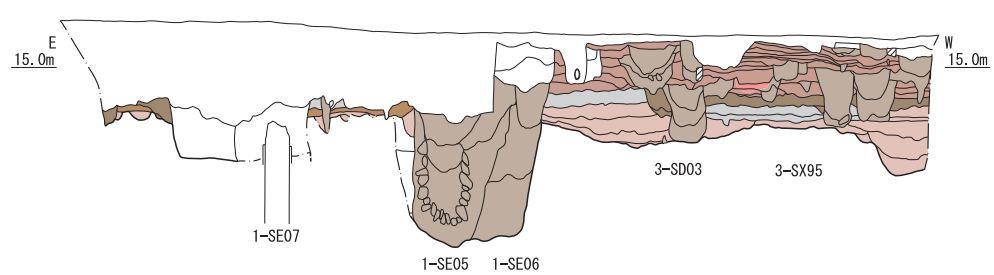
調査区内の基本層序は図2に示すように盛土・攪乱土（厚さ10～130cm）、近代及び江戸時代の整地層（厚さ約60cm）、造成土（厚さ20～60cm）、中世耕土（厚さ約20cm）、古代の遺物包含層（厚さ約10cm）を経て黄褐色もしくは黒褐色土に至る。このうち黄褐色土はいわゆる「地山」で、その形成時期は弥生時代前期以前と考えられる。地山の標高は、調査区南端で14.2m、北端で14.5mである。

このうち造成土は、西壁断面からも明らかなように1-SK30、3-SD01を検出した部分に存在する北側と南側の段差を整地する意図で為されたもので、本調査区のように大規模な造成痕跡の検出例は少なく、その存在は特筆される。調査は概ね造成土の上面を第1面、中世耕土上面を第2面、地山上面を第3面として実施した。

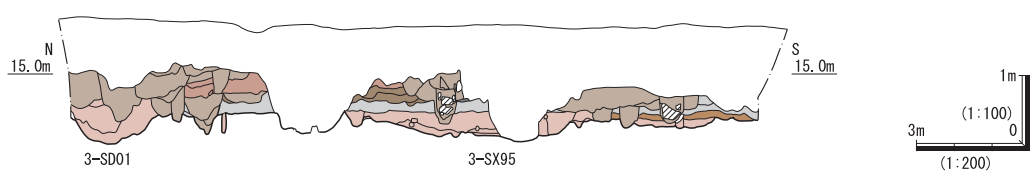
調査区西壁



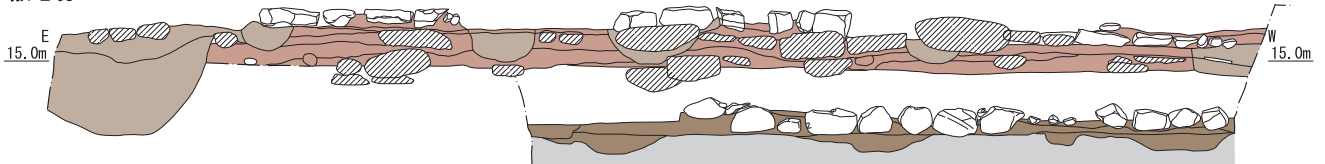
調査区南壁



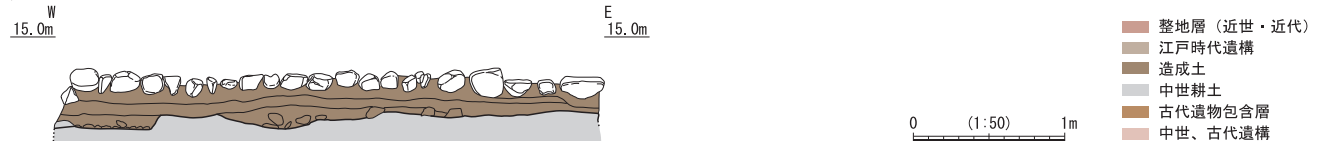
調査区東壁



敷地境 1



敷地境 2



- 整地層（近世・近代）
- 江戸時代遺構
- 造成土
- 中世耕土
- 古代遺物包含層
- 中世・古代遺構

図2 調査区土層断面図、敷地境石列断面図

第2節 第1面の遺構と遺物

3軒の町屋に伴う敷地境、礎石、塙列建物跡、半地下式竈、地上式竈、大型土坑等を検出した。敷地境は2箇所検出した。南側を敷地境1、北側を敷地境2と呼称し、敷地境1の南を町屋1、敷地境1と2の間を町屋2、敷地境2以北を町屋3とした。前述した『大黒町絵図』によれば、町屋1が「又十郎持屋敷」、町屋2が「惣左衛門」、町屋3が「甚蔵」に比定できる。なお、第2面においても江戸時代の遺構を検出しているが、それらについても本節でまとめて記載する。敷地境は江戸時代を通じて踏襲されているため、各町屋の様相を概述したのち、塙列建物、布掘基礎、竈及び大型土坑について記載する。

敷地境1 調査区西端から東側へ7.6m分検出した。概ね1m間隔で扁平な石材を配し、その間を小振りな円礫で埋めている。図2に示すように少なくとも4回の造り替えが認められ、最上段から最下段の石材の天端のレベル差は約60cmを測る。最下段を除き、検出した礎石は概ね10cmずつ嵩上げされている。

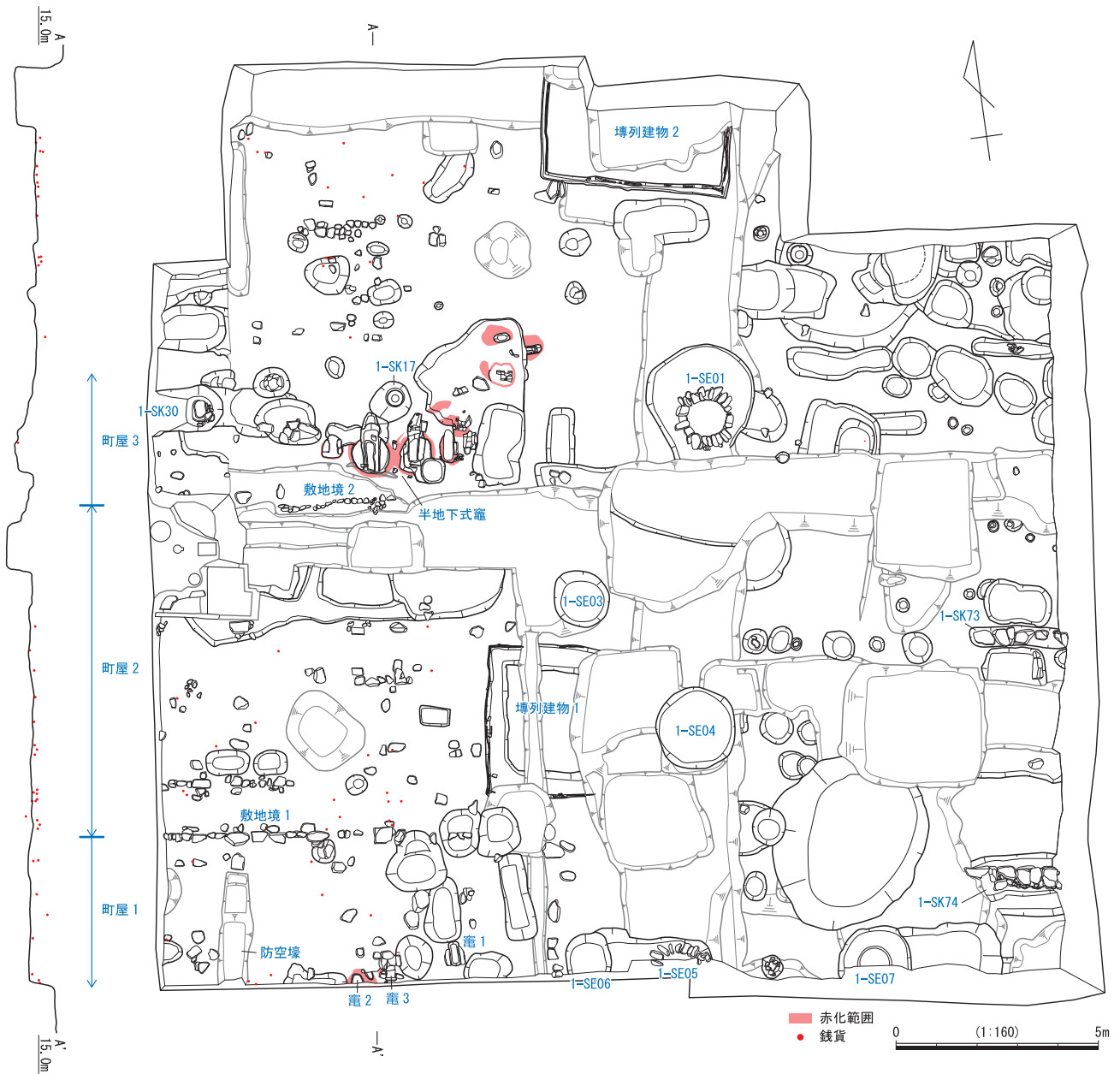


図3 第1面平面図、銭貨垂直分布図

最下段の石列の上面には厚さ約30cmの造成土が存在する。その土中には室町時代の土器片とともに古代から中世にかけての布目瓦（図10-23）が含まれていた。城下町建設の早い段階にこうした遺物を含む場所の土砂によって、造成されたのであろう。他都市では中世から近世への移行期に大規模な造成の事例があるようであるが、姫路では類例は少ない。姫路城城下町跡においては本調査区の事例が示すように地形の段差を解消するなどの限られた範囲での造成工事が行われていた程度と思われる。

敷地境2 調査区西端は攪乱を受けているため、残存した延長2.9m分を検出した。上部は攪乱を受けているため残存しておらず、層位的には敷地境1の3段目と対応する。敷地境1と2の間隔は、7.7mを測り、町絵図に記された「惣左衛門」の間口「三間半六尺六寸（≒7.68m）」と概ね合致する。使用石材は小振りで性格の特定は困難であるが、後述する半地下式竈の検出状況や文献の記載を勘案し、敷地境と判断した。

町屋1 礎石、布掘基礎、地上式の竈3基と礎石、井戸3基、土坑、防空壕等を検出した。礎石の残りは悪く、建物を復元するまでには至らなかった。布掘基礎（1-SK74）は調査区東端で検出した。町屋1での広がりには判然としないが蔵の基礎と考える。井戸は調査区南壁沿いで1-SE05と1-SE06、1-SE07を検出した。1-SE07はコンクリート造で掘方径1.8m、井戸側径80cmを測る近現代の井戸である。1-SE05は石組み井戸で、掘方径1.8m以上、石組み内径85cm、深さは1.7m以上を測る。調査区外に大半が広がるため調査は掘方のみにとどまり、遺物も確認できていない。1-SE06は掘方が垂直に掘り込まれ、1-SE05に切られていることから1-SE05に先行する井戸と判断した。掘方径は1.6m以上、深さは1.7m以上である。遺物が出土していないため時期は不明である。その他、遺構ではないが第2次世界大戦時の防空壕を調査区南西端で検出した。幅80cm、延長2.8m、深さ95cmを測る南北に細長い土坑で、階段状に掘り込まれ、壁面に板材の痕跡が残っていた。貯蔵等を目的とした地下式土坑の可能性もあるが、姫路城下町の町屋ではその検出例は今のところ知られていない。ここでは、土坑内が戦災焼土で埋まっており、赤化した瓦や溶融したガラス瓶等が大量に出土したことから防空壕と評価しておく。

町屋2 間口は7.7m、裏行は絵図では15間5尺であるが、そのうち23.2m分まで調査した。検出した遺構は、礎石、塙列建物、布掘基礎、井戸2基等である。礎石は柱筋の通る部分もあるが、間取りを復元できるまでには至らない。礎石の一つには墨付け線が認められた。井戸は塙列建物1の北で1-SE03、東で1-SE04を検出した。いずれも石組み等は検出できなかったが、垂直の掘方を持つこと、町屋内における位置から井戸と考えた。1-SE03は掘方径1.4m、深さは2.1m、1-SE04は掘方径2.0m、深さは3.5mを測る。いずれも遺物が出土していないため時期は不明である。調査区東端で、町屋1と類似する布掘基礎（1-SK73）を検出した。検出遺構から町屋の構造を復元すれば、間口の約8m奥まで建物（店）があり、その奥に塙列建物と井戸が配され、更にその奥に廃棄土坑と蔵が存在したことが判明する。

町屋3 間口は11m以上で礎石、塙列建物、井戸、半地下式竈、竈、大型土坑等を検出した。礎石の残存状況は悪く、建物の復元は困難である。塙列建物2は礎石の北側、調査区外に広がる位置で検出した。半地下式竈は敷地境2に接した位置で検出した。それに近接した位置で地上式竈6基を検出した。第2面において半地下式竈に伴うと思われる大型土坑（1-SK30）の全容を検出した。これらの遺構の組み合わせと配置は、第389次調査で検出したものと共通し、生業を同じくすることがわかる。間口から約12m奥まで建物（店）があり、その奥で井戸と塙列建物が配置され、さらに奥には廃棄土坑等が広がるなど、遺構配置は町屋2と共通する。井戸はいずれも石組みである。1-SE01は第1面で全容を検出し、2-SE02は掘方を第1面で検出していたが、石組みの検出は第2面で行った。1-SE01は掘方径2.5m、石組み内径90cm、深さは1.3m以上である。石組み埋土から近代の煉瓦、陶磁器類が出土した。2-SE02の掘方は東西に長く、最大で4mを測る。石組みの上部は直径1m、下部は一辺70cmの木材を方形に組んでいる。埋土からは青花碗11、備前焼播鉢12が出土した。17世紀前半に位置づけられる。

塼列建物 町屋2で検出したものを1とし、町屋3のそれを2とする。

塼列建物1 東側が攪乱を受けるが、残りは良好である。検出規模で南北3.6m、東西2.6m以上を測る。幅55cmの溝状の掘方内の端に塼を据え付けている。検出時には、西側の塼列に沿って倒壊したとみられる塼を平面的に検出した。このことから塼は本来2段積みされていた可能性が高い。塼列のコーナー部分は丸瓦で補強している。使用した塼は一辺27～28cm、厚さ2cmで13を図示した。塼列の内側には礎石等は確認できなかった。

塼列建物2 調査区北端で検出し、調査区外へ広がる。検出規模で東西4.6m、南北2.2m以上を測る。幅15～20cmの掘方内に塼を据え付ける。塼列の内側には礎石等は確認できない。使用した塼は一辺23～27cm、厚さ1.5cmで14を図示した。

塼列建物1・2とも遺物を伴わないため厳密な時期は不明であるが、出土層位から江戸時代後半とみられる。これらが織豊期の塼列建物と同列に扱えるかどうかは不明であるが、近年、姫路城城下町跡の綿町、元塩町、本町、下久長町等で検出例が確認されている。

布掘基礎 町屋1と町屋2の第1面と第2面でそれぞれ検出した。いずれも遺物が出土していないため、厳密な時期は不明であるが、第1面は江戸時代後半、第2面で検出した遺構は江戸時代前半と考えられる。

1-SK74 幅1m、延長2.3m以上の掘方内に割石を2段積んでいる。石積みは北側に面を持つことから、本遺構は建物の北面を構成する基礎と考えられる。

1-SK73 幅50cm、延長2.3m以上の掘方内に石材を据えている。2時期に分けられ、上層は1-SK74と同様、割石を使用し、下層は円礫を用いている。敷地境1の延長にあたる位置で、同様の石材を配した2-SK90、2-SK97を検出した。下層ではこれらが一連となり南北4.7m、東西2.3m以上の規模の蔵と考える。

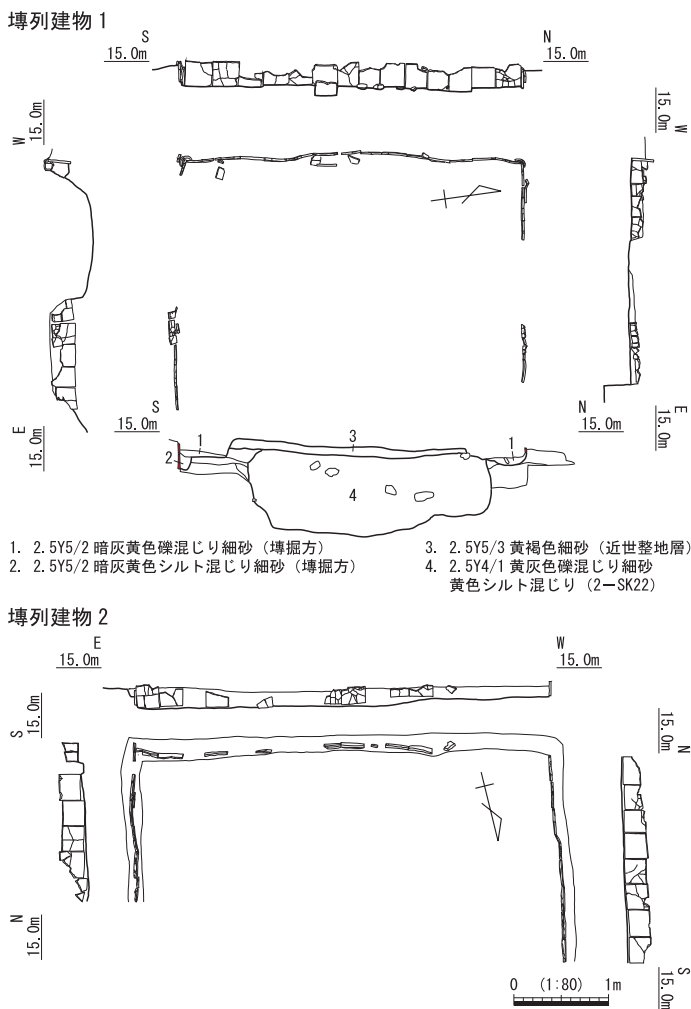


図4 塼列建物1・2 平・断面図

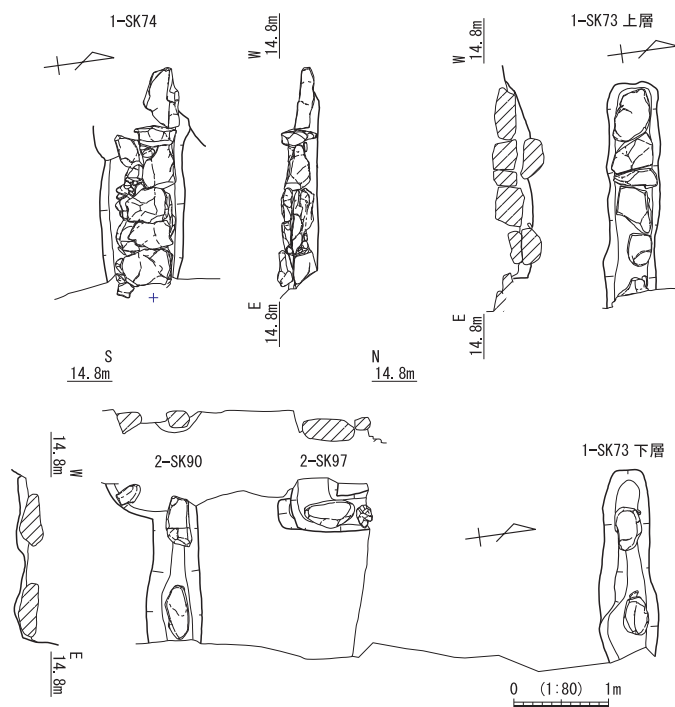


図5 布掘基礎平・断面図

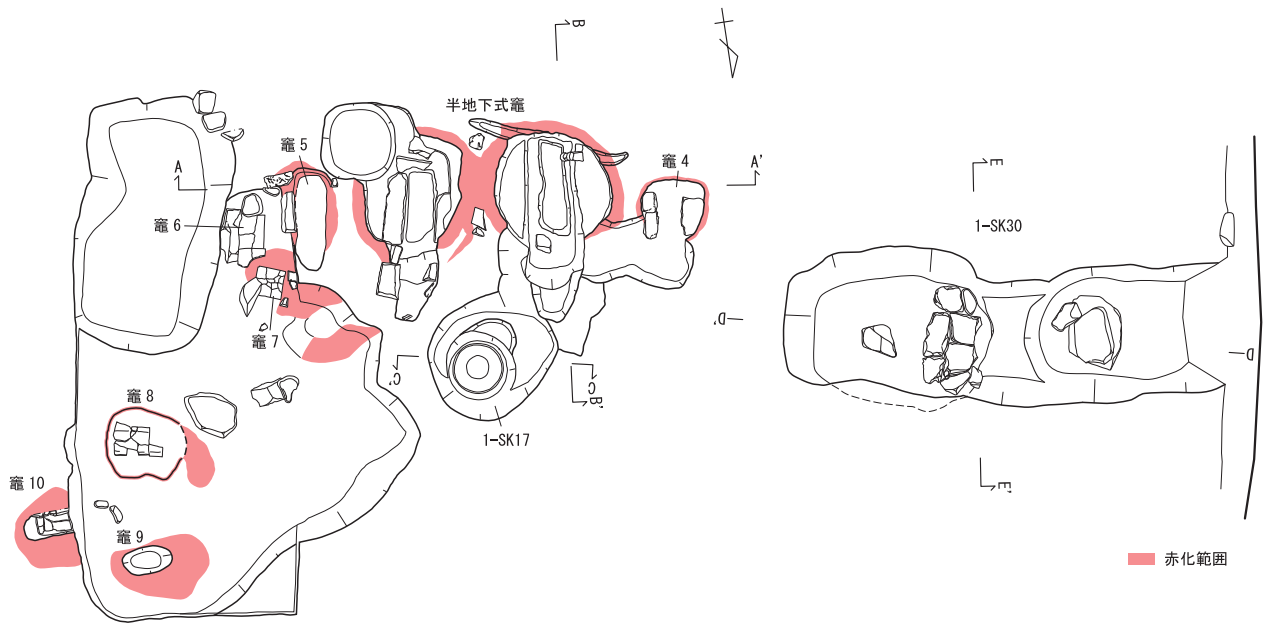
町屋1竈 調査区南壁沿いで地上式竈を3基検出した。竈1は調査区西端から7.4m東の位置で検出した。焚口を北側にもち、燃焼室の規模は幅25cm、長さ60cmである。豊島石（火山礫凝灰岩）を構築部材として用い、浅く掘りくぼめた掘方内には炭が充満していた。竈2と3は竈1の西2mの位置で検出したが、検出レベルが異なることから併存したものではない。竈2は燃焼室を構成する石材等は残存していない。検出規模で幅30cm、長辺25cmを測る。焚口は北側と想定する。竈3は竈2の東で検出したが、一連のものではない。竈の心材として河原石をコの字状に配し、床面に平瓦を2枚並べる。焚口は北側であろう。

町屋3竈 半地下式竈1基と地上式竈を6基検出した。いずれも同時期のものではないが、検出した位置は調査区西端から6m東側付近で、町屋内における竈の配置に通時的な共通性がうかがえる。

半地下式竈 燃焼室を2基持つ連基式で、北側から燃焼室1・2と呼称する。掘方は東西に長い隅丸長方形を呈し、東西3.6m、南北2.2m、深さは遺構検出面から50cmを測る。燃焼室1の竈口の直径は93cm、深さは40cmで、周囲は赤化している。断面から2回の造り替えがうかがえ、当初の深さは遺構検出面から50cmである。床面に豊島石の灰掻き石を据え、側面にもコの字状に組んでいる。焚口は燃焼室から約50cm北へ延びるが第389次調査で検出したようなロストル構造を取るようなものではない。燃焼室2は竈口の直径75cm、深さは50cmである。こちらも少なくとも2回の造り替えが認められるが、深さは変化していない。焚口部分は北へ60cm延び、側面に割石を検出したが残存状態は悪い。これらの背後で埋甕SK17を検出した。埋甕も掘方内に含まれることから当初から半地下式竈と一連で配置されたものと考えられる。丹波焼甕8を使用し、中から土師器皿1～3、染付蓋4、磁器碗5、磁器壺6、堺・明石系播鉢7がまとまって出土した。時期は18世紀前半に位置づけられる。

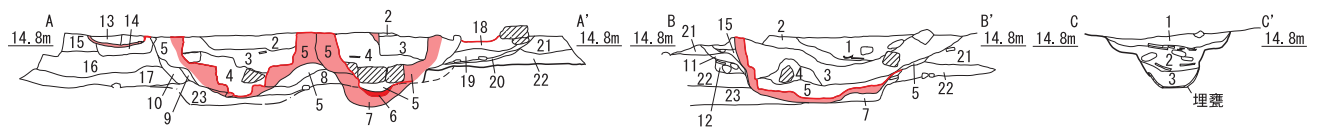
地上式竈 竈4は半地下式竈の西で検出した。燃焼室は直径50cm、深さは10cmを測り、焚口は北側である。半地下式竈に赤化範囲が切られることから半地下式竈以前の竈である。竈5・6・7は半地下式竈の東で検出した。構築順は竈7→竈6→竈5となる。竈5は半地下式竈の掘方上に位置することからこれに後行する。竈5は河原石をコの字状に組み、燃焼室の幅25cm、長さ75cmを測る。竈6は豊島石と河原石をコの字状に組み、床面に平瓦を敷く。竈7は竈6の下に炭層が広がる部分である。石組み等は検出できていないが、床面とみられる平瓦と炭層の広がりから燃焼室と判断した。これらの竈の配置は不揃いで当初からそれぞれ単独で存在したものと推測する。竈8と9は竈7の北約1mの位置で検出した。いずれも石組み等の構造は残っていないが、平瓦の残存と赤化・炭の範囲から認識した。検出状況から2基は並列していた可能性が高い。竈8は検出規模で幅25cm、長さ55cm、竈9は幅22cm、長さ40cmでいずれも西側に焚口を想定できる。竈6から9は東西3.3m、南北2.8m、深さ5cm程の整地層の下位で検出した。この整地層に切られる状態で竈10を検出した。床面に平瓦15を敷き、側面にも平瓦を用いる構造で、幅20cm、長さ40cm以上を測る。時期を特定できる遺物が出土していないが、切り合い関係から竈6・7・8・9・10は半地下式竈の構築以前に位置づけられる。半地下式竈を含め18世紀前半までにこれらの竈は廃絶し、竈5のみがその後の町屋に伴うものと考えられる。

大型土坑（1-SK30） 本来の掘り込み面は第1面であるが、上部に別の遺構が存在することから第2面において平面プランを確認した。2基の土坑が連結し、東西に長い形状を呈す。第389次調査例を参考にすれば西側に更に広がる可能性がある。検出規模で東西3.3m、幅1.1mを測る。深さは遺構検出面から1.6mを測り、土坑底で検出した根石の位置から少なくとも2回の造り替えが認められる。遺物は染付碗9、土師器炮烙10が出土した。時期は18世紀中頃までに位置づけられる。大型土坑を間口側に配置し、埋甕を伴う半地下式竈がそれよりも奥側に配される様相は、第389次の様相と共通している。このことから本遺構についても醸造に伴う男柱の可能性を考えておきたい。今回の調査成果によって調査区界限で同種の生業が営まれていたことがより明確になった。



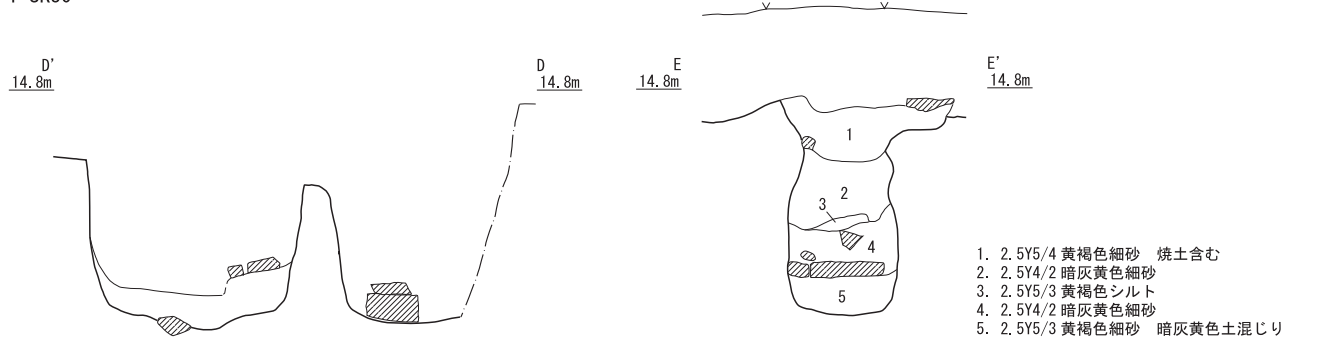
半地下式竈

1-SK17



- | | | |
|---|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 (上層遺構 SK37) 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 (竈埋土) 3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト 焼土混じり (竈埋土) 4. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (竈埋土) 5. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 焼土混じり (構築土) 6. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 7. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 炭化物混じり 8. 2.5Y5/2 ~ 5/1 暗灰黄~黄灰色シルト 9. 2.5Y5/1 黄灰色シルト 10. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混じり細砂 11. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 12. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト | <ol style="list-style-type: none"> 13. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 (竈5埋土) 14. 2.5Y5/4 黄褐色細砂 15. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 16. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 17. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 黄褐色土混じり 18. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 下位赤化 19. 2.5Y5/3 黄褐色シルト混じり細砂 20. 10YR3/1 黒褐色粗砂 21. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 焼土混じり 22. 2.5Y5/3 黄褐色シルト 黒褐色粗砂、焼土混じり 23. 2.5Y5/1 黄灰色細砂 (中世耕土) | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 灰色土混じり 2. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 遺物多量 3. 2.5Y3/2 黒褐色細砂 |
|---|--|--|

1-SK30

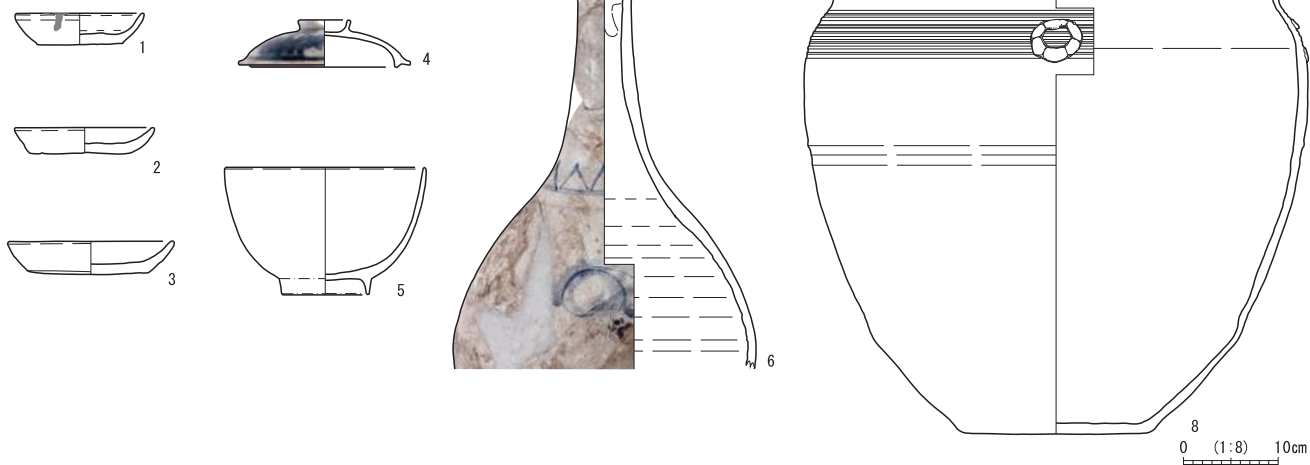


1. 2.5Y5/4 黄褐色細砂 焼土含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
5. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 暗灰黄色土混じり

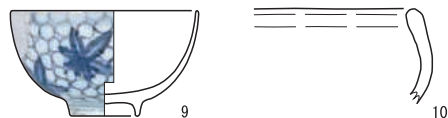
0 (1:60) 1m

図6 半地下式竈と大型土坑 (SK30)

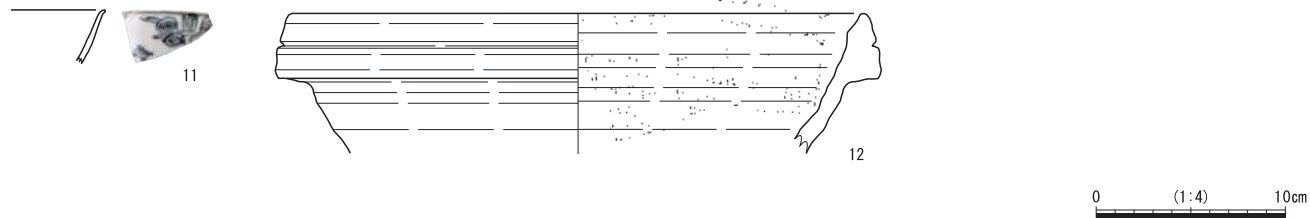
1-SK17



1-SK30



2-SE02



埴列建物 1

埴列建物 2

竈 10

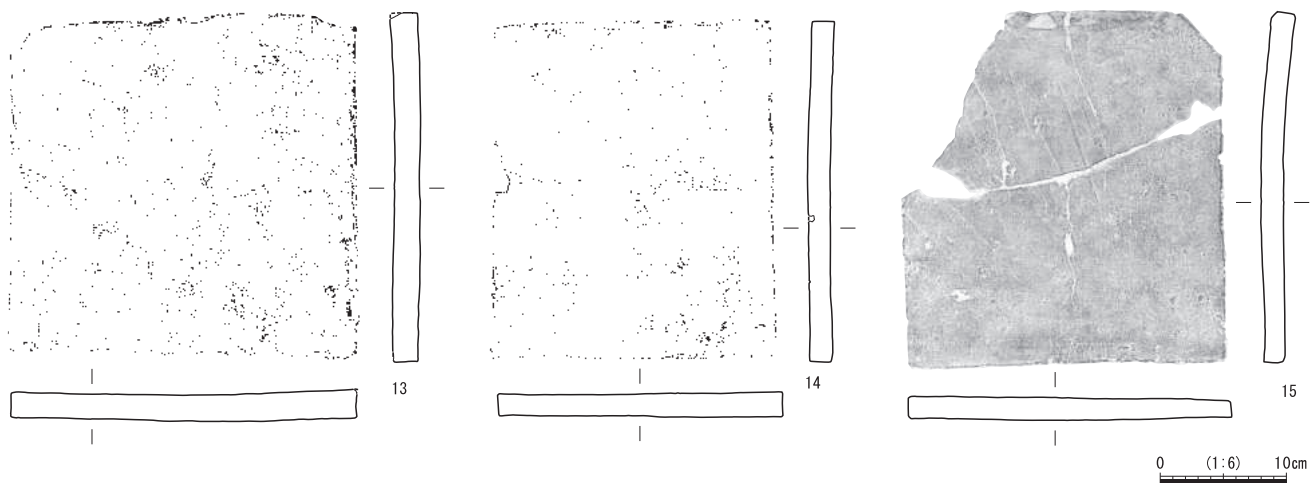


图7 第1面出土遺物

第3節 第2面の遺構と遺物

中世耕土上面を検出面とした。同面で検出した遺構のうち、江戸時代のものについては第2節で記述したため、ここでは江戸時代以前の遺構について述べる。検出した遺構は溝と耕作痕跡等である。中世耕土は、姫路城跡の調査で標準土層として広域に広がっていることが確認されており、これまで中世前半期の遺物をわずかに含むことから当該期のものと認識されていた。近年、同層の下層で15世紀代の遺構が確認される例が増加したことから16世紀から城下町建設直前までに形成された土層と考えられる。ただ、耕土層は各所の調査で検出されるものの畦や水路といった耕作に伴う遺構の検出例は少なく、その実態は不明であった。そうした意味において今回検出した耕作痕跡と溝は城下町建設以前の実態に迫る有力な手掛かりといえる。なお、調査区北側で検出した2-SK44や2-SK45は第3面で検出した3-SD01の影響による凹みである。

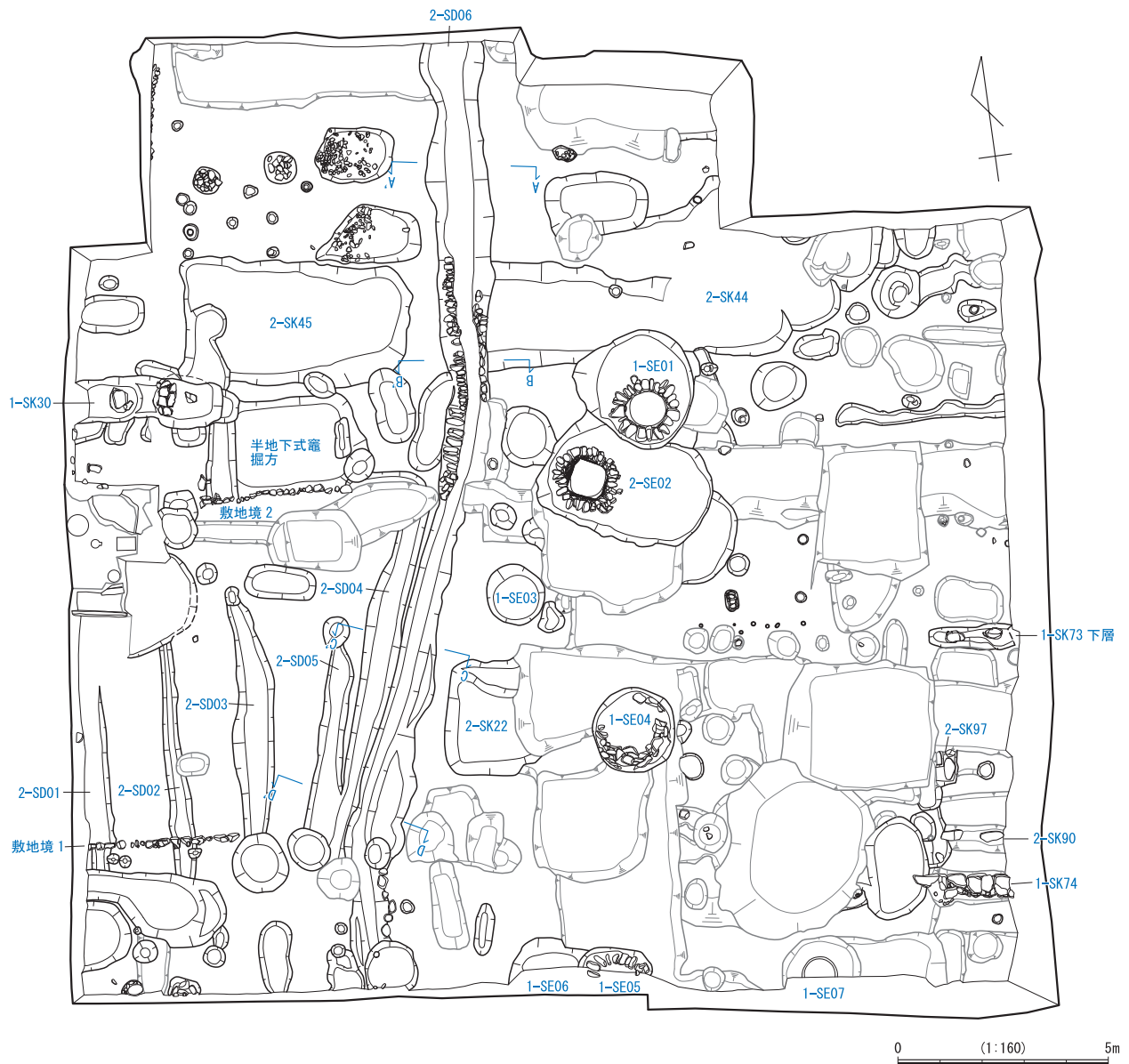


図8 第2面平面図

2-SD06 蛇行しながら南北に延び、延長約23mを検出した。溝の中央部と南端で一部石組みが残っていたことから、本来は全域が石組み溝であったのかもしれない。石組みは幅40cm、深さ40cmを測る。埋土の下層に粗砂が認められることから流水状態にあり、水路として機能したものと推測する。石組みは河原石の小口を溝の内側に向けて据え、部分的に2段残っている場所も確認できた。

耕作痕跡 5条 (SD01～SD05) 確認した。これらは図2に示す敷地境1の断面に見るように最下段の敷地境石列の下に位置し、造成土によって埋められている。幅は50cm～1m、延長は5.5～8.5mを測り、畝立ての痕跡とみられる。遺構の方位は概ね調査区と平行していることから、江戸時代の町割りには前代の地割を踏襲していると考えられる。なお、中世耕土は水田の耕土とみられるが、畝立てをしていることから二毛作が行われていた可能性も指摘できよう。

検出した遺構は耕作に伴うものが大半であるため、第2面の出土遺物は少ない。2-SD04の青花皿16、土師器炮烙17、備前焼播鉢18、2-SD06の土師器皿20、備前焼播鉢21、軒丸瓦19を図示した。19は文字瓦で瓦当の一部のみ残存するが、残存する部分から「飭」の字とみられる。こうした文字瓦は寺名を示す可能性があり、該当する寺名を検索すると「飭磨寺」がその候補にあがる。「飭磨寺」は「西大寺諸国末寺帳」に末寺として記載がある(坂田1999)。その所在地は明らかではないが、『峯相記』にも記載されている。『播磨鑑』には飾磨寺とは無量延長山飾磨薬師寺であるとされ、飾磨郷清水村に寺跡があると記される。その他、『村翁夜話集』等の地誌にも種々記載が認められる。これらを要約すれば、飾磨の海中より引き上げた霊像を安置したのが始まりで、当初は飾磨清水に飾磨寺として建立されたが、兵火にあい、霊像は転々としたのち、国府寺村付近に移された。その後、国府寺次

2-SD06 石組み

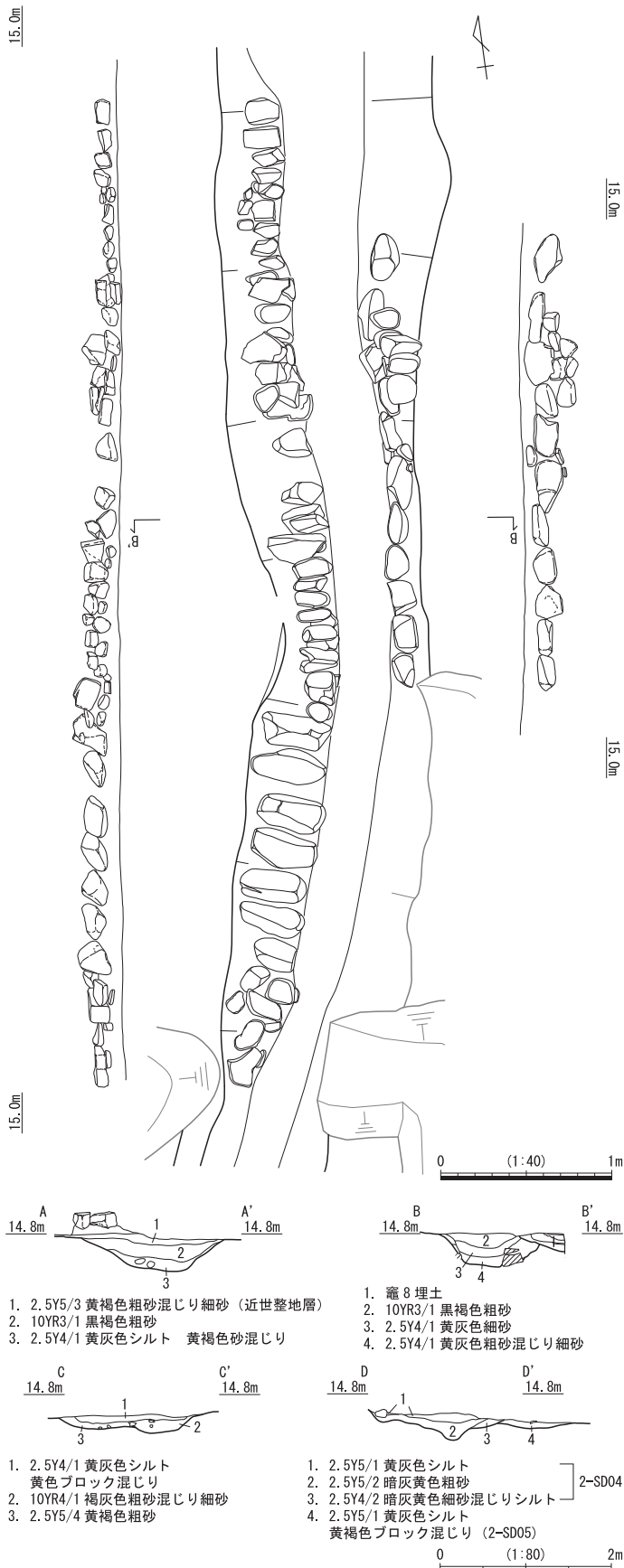
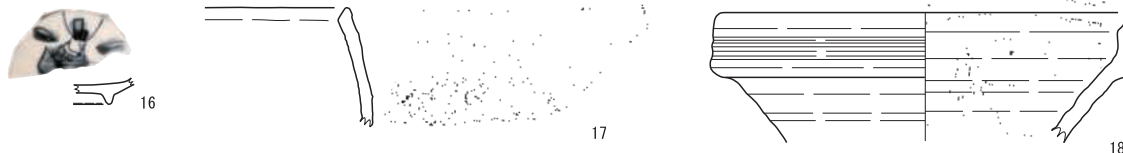


図9 第2面検出遺構 平・断面図

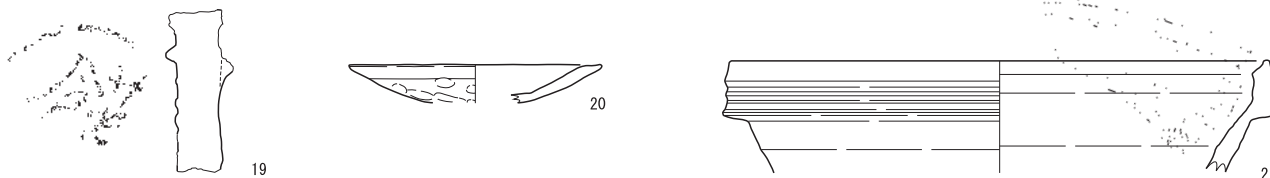
郎左衛門によって国府寺村に新たに堂が建てられた。江戸時代以後、霊像は国府寺家の菩提寺である善導寺におさめられたようである。そもそも西大寺末寺の「飭磨寺」と「飭磨薬師寺」が同じ寺院を指すのか否かを含め今後検討すべき課題は多いが、出土資料自体は、国府寺村と「飭」の瓦との関係を裏付けるものといえる。なお、橋本政次は「国府寺」とは「飭磨薬師」のことであるとしている（橋本1957）。

その他、博列建物の下層にあたる2-SK22から瓦質火鉢22が出土した。厳密な時期は不明であるが、江戸時代以前の遺物であろう。造成土から出土した軒平瓦23、中世耕土から出土した軒丸瓦24・25、五輪塔火輪26を図示した。23は中心飾り五弁文の軒平瓦で、同文の資料は置塩城跡と弥勒寺から出土している。24は複弁蓮華文軒丸瓦、25は三ツ巴文軒丸瓦である。

2-SD04



2-SD06

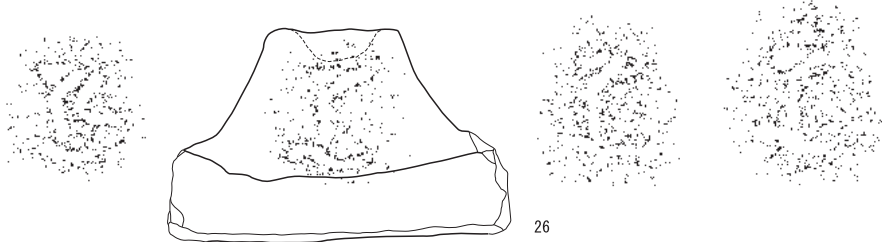
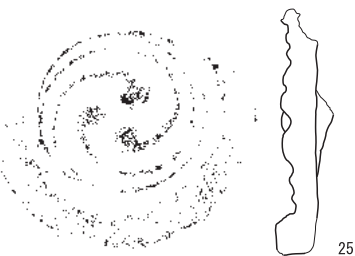
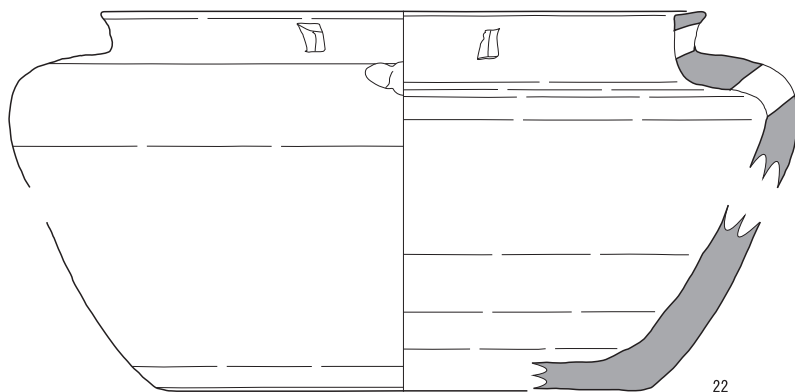


2-SK22

造成土



中世耕土



0 (1:4) 10cm

図10 第2面出土遺物

第4節 第3面の遺構と遺物

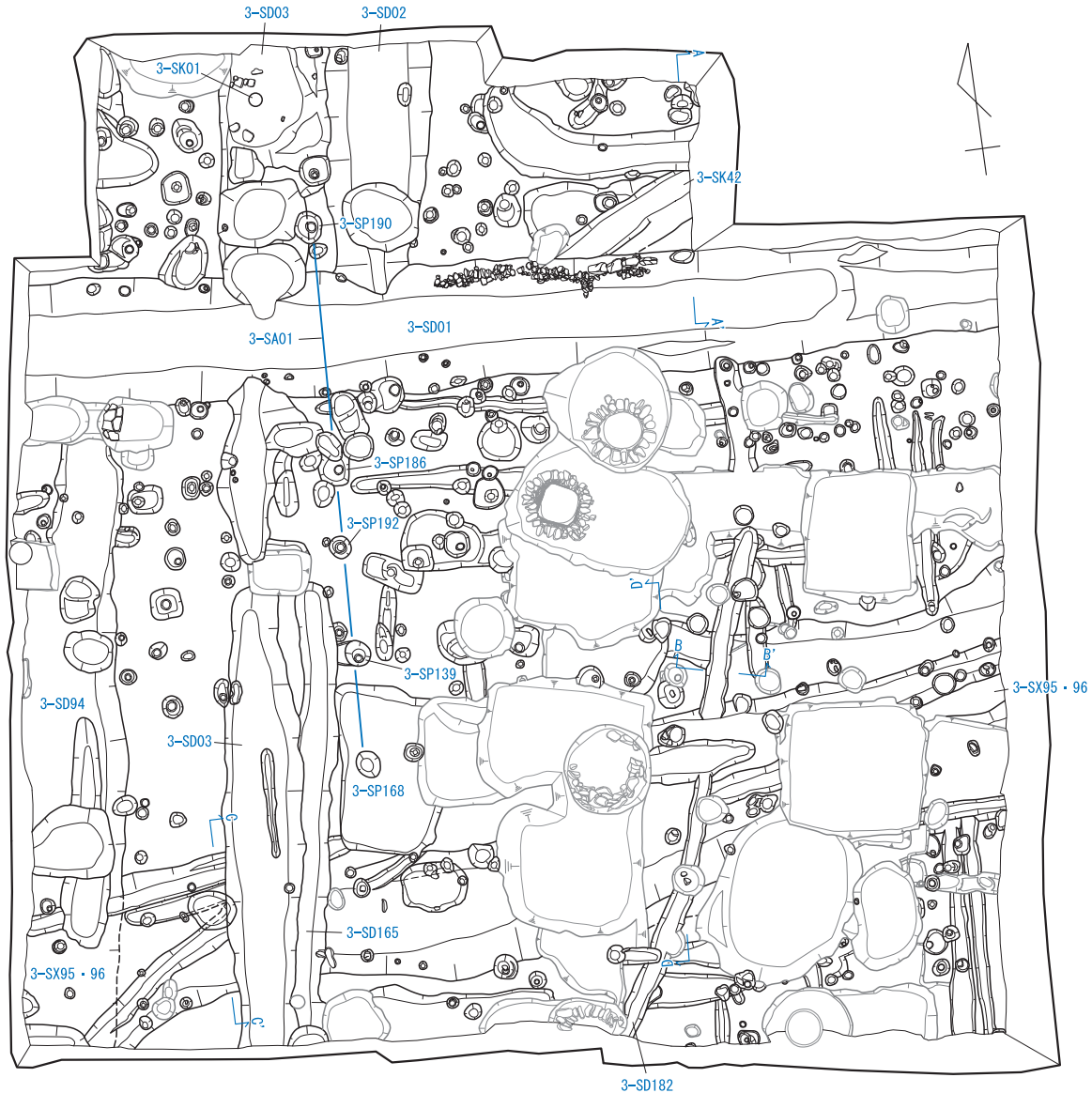
地山上面で検出した遺構である。地山は黄褐色土と黒褐色土に分けられ、黒褐色土は黄褐色土上面に堆積した自然堆積層である。調査の終盤に部分的に断割りを行ったが、黒褐色土からは遺物は出土しなかった。第3面では、大きく3時期の遺構を確認した。主な遺構として、3-SD01と3-SD02は室町時代の区画溝、3-SD03は平安時代の溝で、西側の3-SD94もこれと並行する同時期の溝である。これらの遺構が切る3-SX95・96は最終的には平安時代に埋められた溝で、埋土からは奈良時代の土器が大量に出土した。奈良時代の遺構として確実なものは3-SK42と3-SD182である。その他多くの柱穴等を検出したが、明確に建物跡に復元できるものはなく、かろうじて3-SA01を認識しえた。柱穴は円形のものが多いが、隅丸方形を呈すものも少なからず存在している。

3-SD01 調査区を東西に横断する延長22m、上幅2.9m、下幅1.3mの溝である。遺構の主軸はN8°Eである。断面形状は逆台形を呈し、溝底の標高は西端で13.85m、東端で14.07mを測る。溝の北肩には延長5.9m、高さ70cm程の範囲に護岸状の石材が認められた。石組みというよりは石を溝肩に貼り付けたような状況を示す。図2に示す調査区西壁の観察からこの溝を挟んで北側の地山が高く、南側は低いことから、溝は地山の傾斜が変化する場所に沿って設けられたと思われる。後述する3-SD02が北から3-SD01に接続する状況であることを踏まえると、この溝は北側にある何らかの施設を区画したものと考えられる。溝内には大量の石が含まれており、いずれも北側から投げ込まれたような状況を示すこともその想定を補強する。埋土には石とともに古代の布目瓦が多く含まれていた。これらも投棄により埋土中に混入したものであり、調査地周辺に布目瓦が散乱していた状況が想像できる。溝内からは布目瓦とともに越州窯青磁碗32と須恵器硯33といった時期の遡る遺物も出土しているが、瀬戸美濃焼灰釉小皿27、瀬戸美濃焼天目碗28、土師器鉄かぶと形埴29、炮烙形埴30・31、備前焼播鉢35～37、備前焼壺34等から溝の廃絶時期をおさえることができる。備前焼播鉢は中世6期の資料で、土師器埴は鉄かぶと形ⅢC類、炮烙形は外面格子タタキで2-SD04出土の17に比べ器高が高く、一段階古い様相を示す。在地土器の様相は豆田Ⅶ期古段階を示し、最終的に溝が埋められたのは16世紀前半といえる。なお、前述した「饒」字軒丸瓦の出土地点は2-SD06と3-SD03が交差する部分であることから、本来は3-SD03に帰属する遺物であった可能性も否定できない。

3-SD02 3-SD01の中央付近から北に延びる溝である。延長5.6m、幅2.3mで、溝底の標高は北端で14.0mを測る。3-SD01と直交することから、両者は一連の溝と考えられるが、接続部分では3-SD02の溝底がやや立ち上がっており、3-SD02から3-SD01に常時水が流れこむ構造ではなく、オーバーフローした水が流れこむ構造とみられる。3-SD02からは図化に耐える遺物の出土は少なく、かろうじて土師器播磨型埴38、備前焼播鉢39を図示したにとどまる。

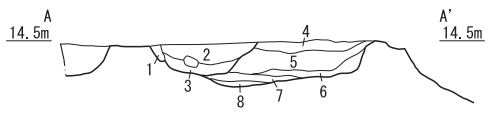
3-SD03 3-SD01・3-SD02に切られる。埋土は暗褐色シルトを主体とし、炭化物をわずかに含んでいる。3-SD01以南では溝状に延び、北側は土坑が連結したような形状を呈す。遺構の主軸はN8°Eである。北側は最終的に4基の土坑が切り合うような平面プランとなったが、調査段階では平面的な埋土の違いは認められなかった。北側の土坑が連結する部分は、総延長6.15m、最大幅は2.2m、遺構検出面からの深さは最大50cmを測る。南側は延長15m、幅1.8m、遺構検出面からの深さは30cmと北側に比べて浅い。並行する3-SD165を切っている。3-SD165と3-SD03とは切り合い関係を認識できたが、埋土は極めて類似している。3-SD165は、延長10.4m、幅80cm、深さ約20cmを測り、3-SD03に比べると小規模である。

3-SD03の埋土中からは多くの遺物が出土した。遺物は特定の場所ではなく、遺構全体から散在した状態で出土したが、3-SD01以北の土坑状となった部分からの出土が目立つ。土器・陶器のうち残存状態が比較的良好な遺物を図16に図示した。図15にはその出土位置を示した。土器等はある程度の時期幅を有すが、



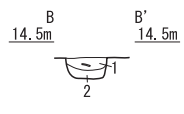
0 (1:160) 5m

3-SK42



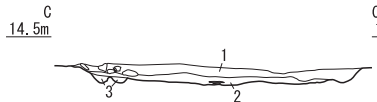
- | | | |
|--------------------------|----------------------------|----------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色細砂 (3面ビット) | 5. 10YR5/2 灰黄褐色細砂 | } 3-SK41 |
| 2. 10YR5/2 灰黄褐色砂 | 6. 10YR5/2 ~ 3/1 灰黄褐~黒褐色細砂 | |
| 3. 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂 | 7. 10YR4/1 褐灰色粗砂 | |
| 4. 10YR3/1 黒褐色細砂 | 8. 10YR4/1 褐灰色シルト | |

3-SD182

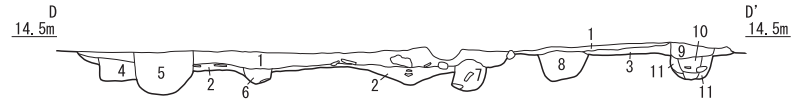


- | |
|-------------------------|
| 1. 10YR4/1 褐灰色細砂 |
| 2. 10YR4/1 褐灰色細砂 黄色土混じり |

3-SX95・96



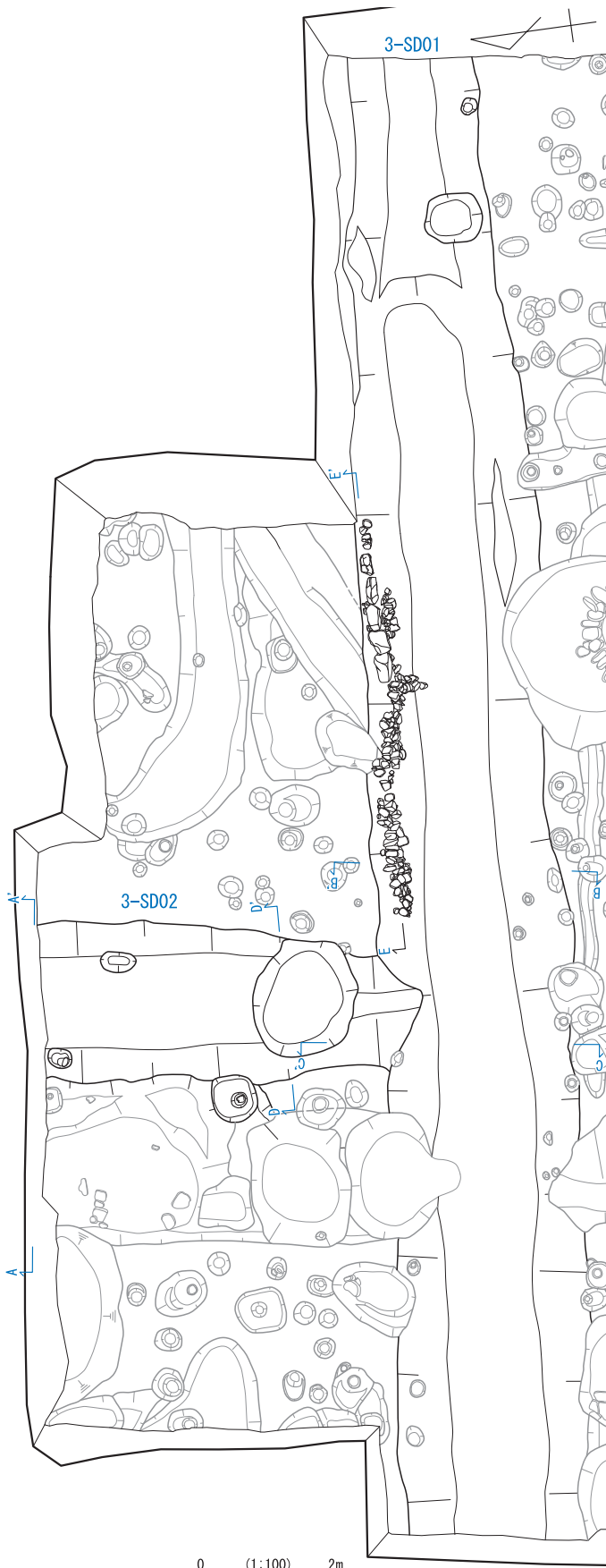
- | |
|--------------------------------|
| 1. 10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物微量含む |
| 2. 10YR4/1 褐灰色粗砂 |
| 3. 10YR4/2 ~ 6/4 灰黄褐~にぶい黄橙色シルト |



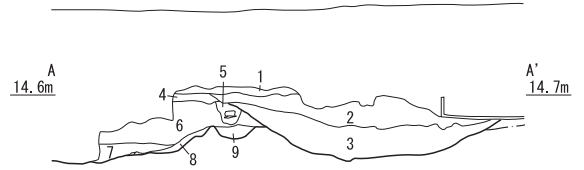
- | | | |
|---------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1. 10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物微量含む | } SX95・96 | 7. 10YR4/2 灰黄褐色細砂 (3-SP302) |
| 2. 10YR4/1 褐灰色粗砂 | | 8. 10YR5/1 褐灰色細砂 炭化物含む (3-SP301) |
| 3. 10YR3/1 黒褐色シルト | | 9. 10YR4/1 褐灰色細砂 |
| 4. 2.5Y5/1 黄灰色細砂 (3-SD182) | | 10. 10YR4/1 ~ 4/2 褐灰~暗灰黄色細砂 |
| 5. 10YR4/1 褐灰色細砂 (1-SK57) | | 11. 10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物微量含む |
| 6. 10YR4/1 褐灰色粗砂混じり細砂 (3-SP287) | | |

0 (1:80) 2m

図11 第3面平面・断面図



0 (1:100) 2m



- 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 (近世整地層)
- 2. 2.5Y5/1 黄灰色細砂 (SD02 埋土)
- 3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (SD02 埋土)
- 4. 10YR5/1 褐灰色細砂
- 5. 10YR5/2 灰黄褐色細砂
- 6. 10YR3/1 黒褐色細砂 炭化物混じり
- 7. 10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂
- 8. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 黒褐色土混じり
- 9. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト



- 1. 2.5Y5/6 黄褐色シルト (近世遺構埋土)
- 2. 10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂
- 3. 10YR5/1 褐灰色細砂
- 4. N5/ 灰色砂混じりシルト
- 5. 10YR5/2 灰黄褐色細砂
- 6. N5/ 灰色礫混じりシルト



- 1. 2.5Y4/1 黄灰色細砂
- 2. 2.5Y4/1 シルト 細砂ラミナ
- 3. 2.5Y5/1 黄灰色礫混じりシルト
- 4. 2.5Y4/1 黄灰色細砂
- 5. 2.5Y4/1 黄灰色礫混じりシルト
- 6. 2.5Y4/1 黄灰色シルト



- 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色礫混じり細砂
- 2. 2.5Y4/1 黄灰色礫混じりシルト
- 3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト 黄色土混じり
- 4. 2.5Y4/1 黄灰色粘土混じりシルト

0 (1:80) 2m

図12 3-SD01・3-SD02 平・断面図

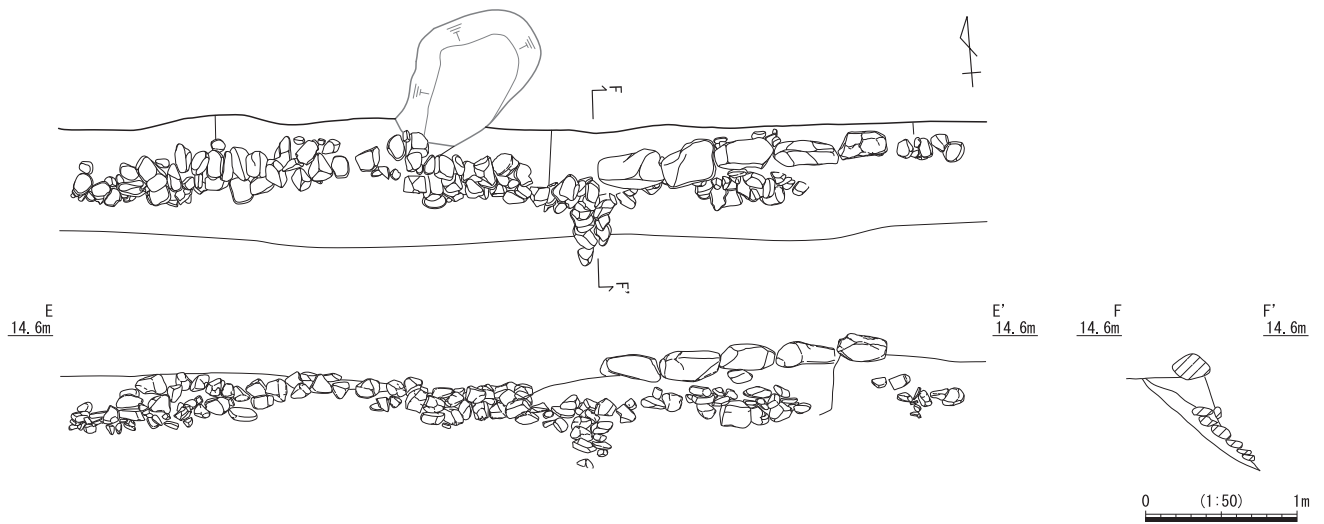
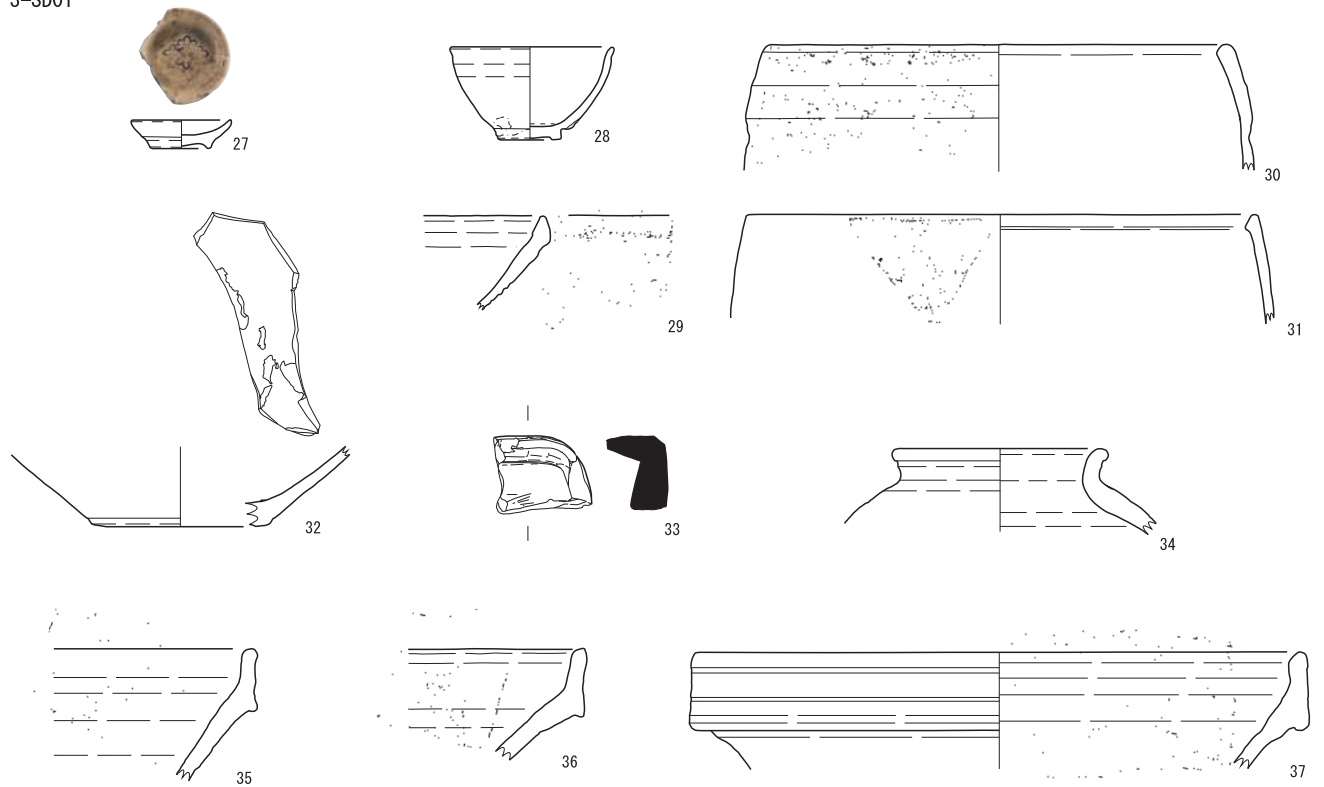


图13 石列平·断面图

3-SD01



3-SD02

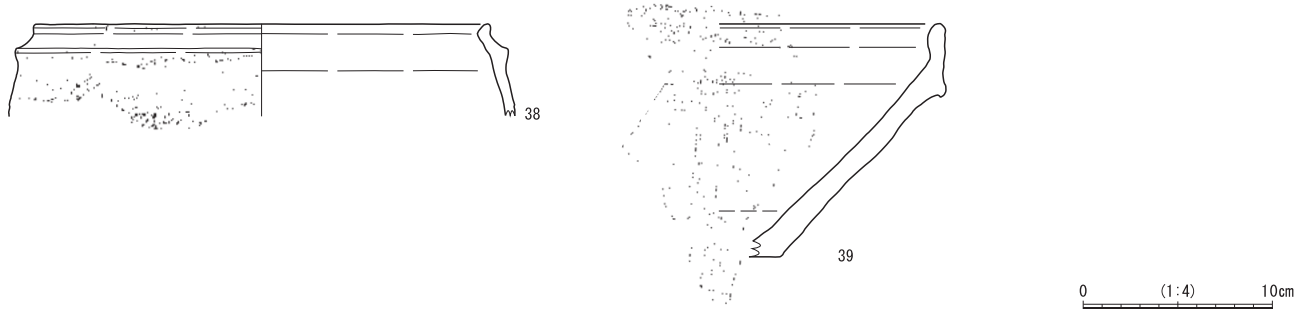


图14 3-SD01·3-SD02出土遺物

溝の廃絶に伴う一括資料と考える。出土遺物は黒色土器、緑釉陶器を含むいわゆる古代末の組成を示している。土師器皿は手づくね40・41、底部ヘラ切り42・43、高台付き44、托皿45が出土した。土師器杯46～49はいずれも底部ヘラ切りである。土師器椀50～53は底部糸切り、54は貼付輪高台である。須恵器杯55・56はヘラ切り、須恵器椀57・60は底部糸切り、58・59は底部ヘラ切りである。61～66は緑釉陶器である。66は軟質であるが、他は硬質である。釉調は61・64・66が濃緑色を呈し、62・63・65は黄緑～淡緑色を呈す。いずれも残りは良好である。61は耳皿、62は輪花碗、63は深椀を模した椀、64は有段高台である。67は内黒の黒色土器A類椀、68は両黒の黒色土器B類椀、69は須恵器壺で、双耳壺であろうか。緑釉陶器は本遺構から小片も含め48点出土した。後述する3-SX95・96分も含め、調査区全体では140片以上出土した。これは本町遺跡周辺の既往調査で見つかった総数に近く、面積当たりの出土数は最多とみられる。遺物の時期は、手づくね成形の土師器皿が京都の土器編年Ⅲ期(930～1010年)の新しい様相を示し、緑釉陶器は10世紀中～後半のものが主体となる。在地土師器はヘラ切り皿、ヘラ切り杯、糸切り椀で村東Ⅱ期新段階の様相を示す。須恵器椀はヘラ切りと糸切りが認められる。土師器皿の年代観から最終的な埋没は10世紀末から11世紀初頭頃に位置づけられる。

3-SD03の検出時に上層から45点以上の土師器皿がまとまって出土した(写真図版4)。平面プランは明確に確認できなかったが、出土状況から3-SD03に掘り込まれた土坑に伴うものと思われる。そのうち70～73を図化した。いずれも底部ヘラ切りで器形も共通する。法量は口径8.5cm前後、器高1.0cm前後で村東Ⅳ期に位置づけられる。3-SD03が切る3-SD165からは土師器高台付きの皿75等が出土した。

3-SD94 3-SD03の西2mで検出した。SD03と平行して南北に延びるが、3-SD01以北は調査区の制限から様相は不明である。また、溝の西端は調査区外に広がるため、幅は不明である。検出規模で延長15.1m、幅2.4m以上、深さ30cmを測る。3-SD03との中心間距離は約4.5mを測る。両者が平行することを勘案すれば、街路側溝の可能性もありうる。その正否はともかく、現在の街区と共通する方位をもつこれらの遺構に、平安時代中期から江戸時代、さらに現代まで続く、町割りの初源を見ることができる。近江産の緑釉陶器椀74を図示した。3-SD03に比べると遺物量は少ないが、基本的に出土遺物の様相は共通する。

3-SX95・96 調査区を北東から南西にかけて斜めに横断する溝状遺構である。3-SD03を挟んで西をSX95、東をSX96としたが、ここでは一連の遺構として述べる。主軸は概ねN2°Wに直交する。検出規模は延長23.3m、幅3.2～6.0mで、溝の埋没後に3-SD03が構築される。溝底には3条の細い流れが確認できる。埋土は粗砂を主体とすることから、流水により埋没したものであろう。埋土中から摩滅の少ない遺物が多く出土した。その大半は奈良時代から平安時代前半頃の遺物であるが、図示したように時期の降るものを含んでおり、溝の最終的な埋没時期は平安時代後期とみられる。土師器椀76は底部糸切り、77・78は須恵器稜椀の蓋と身である。79は須恵器椀である。80は須恵器円面硯、81は線刻のある須恵器体部である。82～89は緑釉陶器である。釉調は83・84が濃緑色、それ以外は黄緑色～淡緑色を呈す。82は畿内産で9世紀中～後半のものである。83は輪花碗、84・87～89は椀、85・86は皿である。83・84は有段高台で釉調も共通し、近江産である。土師器羽釜90・91は短い顎が貼り付く。本遺構は3-SD03に先行するが、土師器椀76や緑釉陶器の様相は共通し、最終的な廃絶時期に大きな差は認められない。

3-SK42 3-SD01に切られる、北東から南西に延びる遺構で、3-SD01を越えて広がらないことから土坑と判断した。幅1.2m、長さ3.7m以上、深さ45cmを測る。遺構の主軸はN25°Wに直交する。遺物は土師器皿92、須恵器杯B93・94が出土した。時期は奈良時代から平安時代初頭に位置づけられよう。

3-SD182 図11では3-SX96を切るように表現しているが、3-SX95・96の底面で検出したもので、本来の切り合いは逆である。検出規模で延長15.2m、幅50cm、深さは25cmを測る。断面形状は箱形を呈す。遺物は土師器杯A95・96が出土した。3-SK42と類似する時期と考えられる。

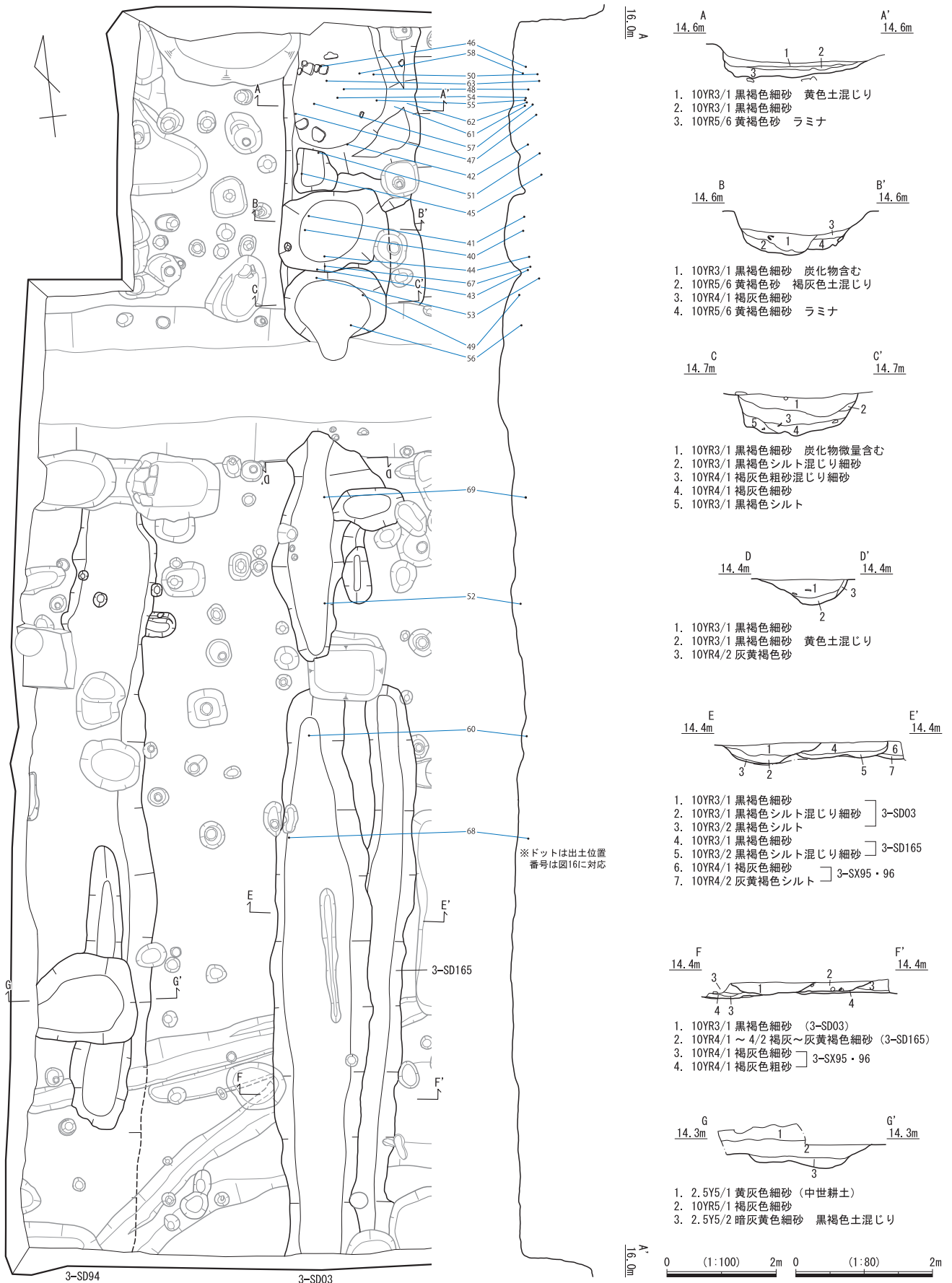
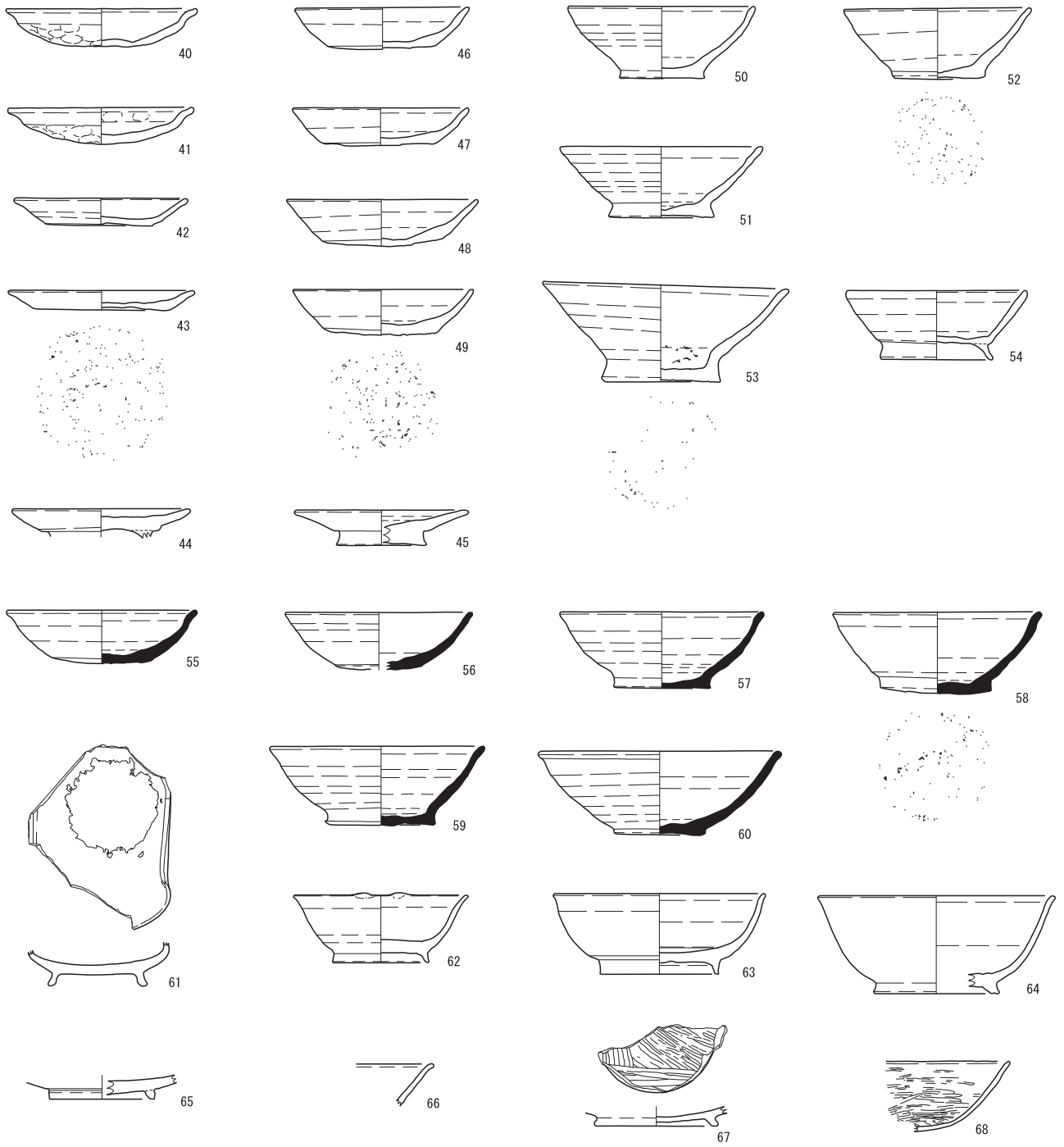


図15 3-SD03、3-SD94

3-SD03



3-SK01

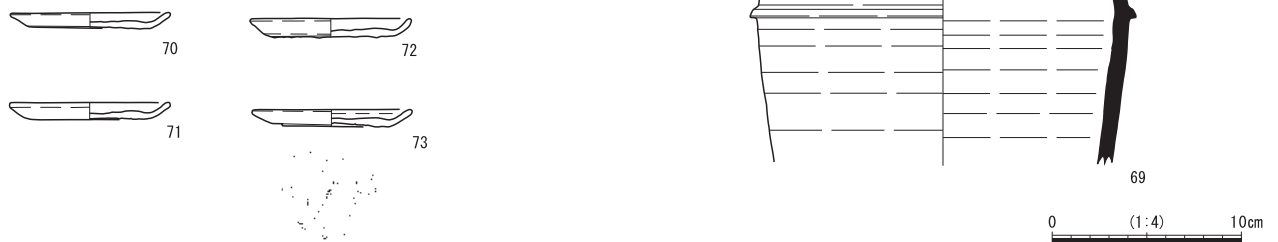
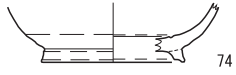
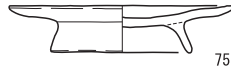


图16 3-SD03、3-SK01出土遺物

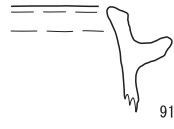
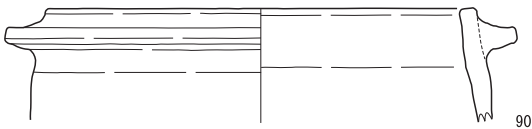
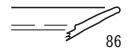
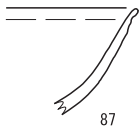
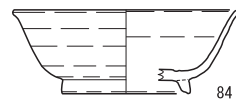
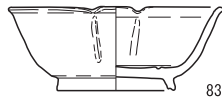
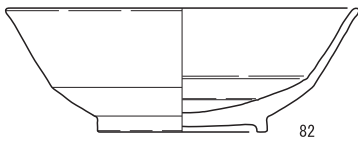
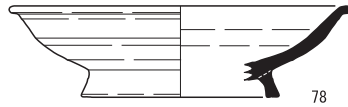
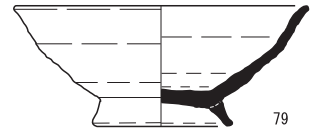
3-SD94



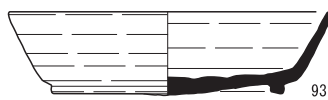
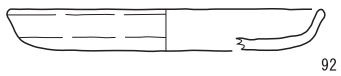
3-SD165



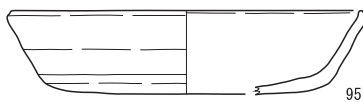
3-SX95 · 96



3-SK42



3-SD182



3-SA01-SP190



3-SA01-SP168



0 (1:4) 10cm

图17 3-SD94、3-SD165、3-SX95 · 96、3-SK42、3-SA01出土遺物

3-SA01 5基の柱穴が一行に並び(3-SP168～3-SP190)、対になる柱列が確認できないため柵と判断した。検出規模で延長12m、主軸方向はN2°Eである。柱間隔は北から5.5m、1.7m、2.5m、2.5mと揃いである。遺物は3-SP190から土師器皿97、3-SP168から土師器羽釜98が出土した。3-SP190は3-SD03に切られることから3-SA1は3-SD03に先行する。遺物が少なく厳密ではないが、主軸が揃うことから3-SX95・96と同時期の可能性を考えておきたい。調査区で検出した柱穴で遺物が伴うものは少なく、明確ではないが、埋土が共通することから、3-SA01と近い時期の遺構と推測する。

瓦 調査区内の遺構から多くの布目瓦が出土した。落下瓦等の遺構に伴うものはないが、軒瓦も数点出土していることからここでまとめて記載する。2-SK44から複弁八葉蓮華文軒丸瓦99が、3-SX95・96からは複弁(八葉)蓮華文軒丸瓦100、古大内式軒丸瓦101、国分寺式軒丸瓦102、本町式軒平瓦104、北宿式軒平瓦105、外縁鋸歯文+唐草文軒平瓦107が出土した。3-SD03からは本町式軒丸瓦103が、2-SD03からは珠文帯+唐草文軒平瓦106が出土している。このうち、100は肉厚で市之郷廃寺や辻井廃寺で出土する同種の軒丸瓦に類似し、奈良時代以前に位置づけられる。図示していないが同種のものがもう1点出土している。対して99の文様は平板で、100よりも時期的に下る可能性もある。101～105はいわゆる播磨国府系瓦である。101の古大内式軒丸瓦は図示していないものを含め2点出土している。106と107は見野廃寺から出土したと伝わる偏行唐草文に近い例とみられる。見野廃寺出土品は8世紀前葉以前に位置づけられている(今里2010)。今回の調査では前述したように奈良時代の遺構の検出は少ないが、これらの瓦から至近に同時代の遺構の存在が予想できる。布目瓦も多いことから瓦葺建物が存在した可能性も高い。また、奈良時代前期もしくはそれ以前に遡りうる瓦が含まれている事実は、播磨国府の広がりを考えるうえで示唆的であり、調査地周辺の重要度はこれまで以上に増したといえよう。

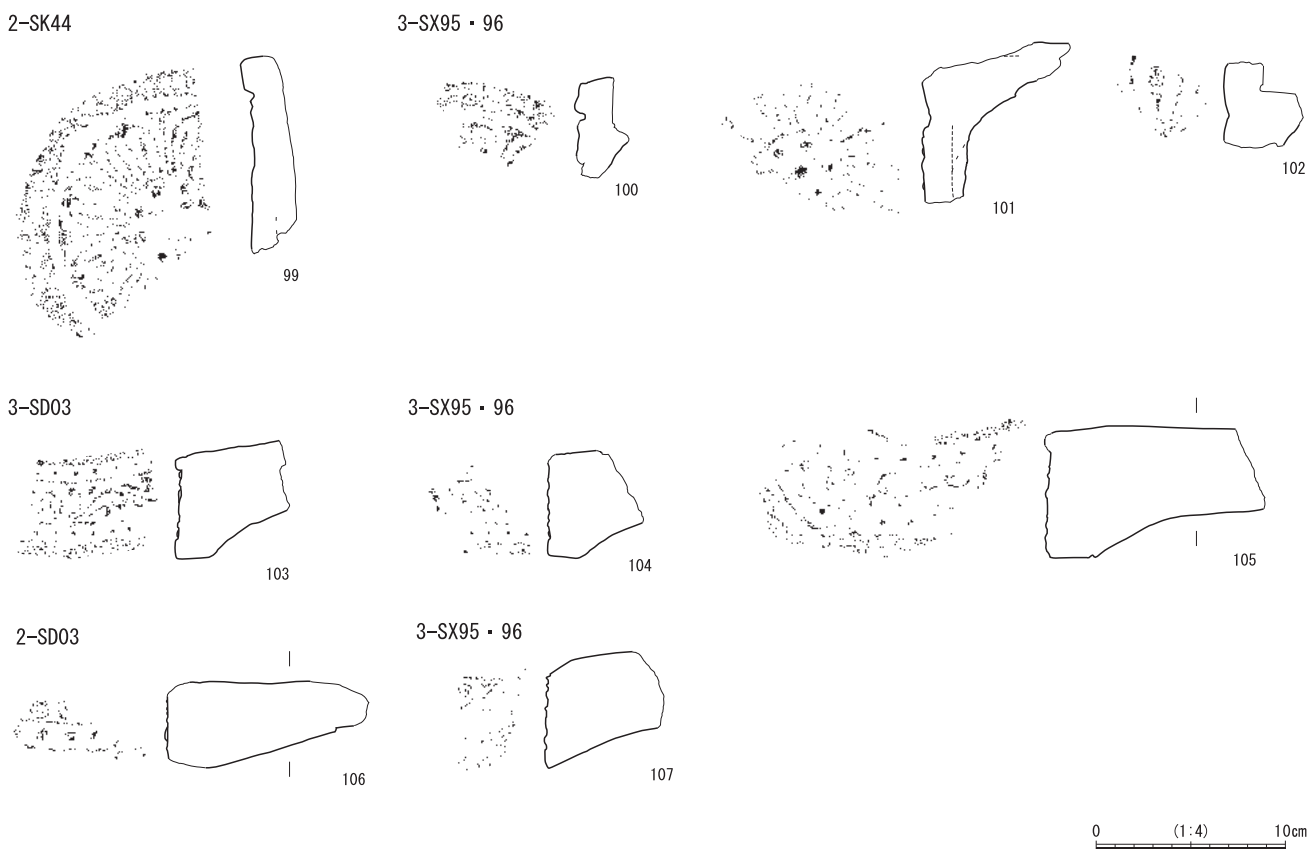


図18 出土古代瓦

第IV章 総括

今回の調査成果は多岐にわたる。同一箇所において奈良時代から江戸時代までの遺構を面的に確認できた事例は姫路城跡における調査でも少なく、当該地における歴史的な変遷をとらえることができた。

まず、第3面の成果としては奈良時代から平安時代中期末にかけての遺構を濃密に検出したことに尽きる。奈良時代の様相は判然としない部分も多いが、出土する遺物量は決して少なくない。また、布目瓦も各遺構から大量に出土している。これらはいずれも2次的に動いたものではあるが、近辺に瓦葺き建物の存在を予感させるに十分な量である。平安時代になると多くの遺構が検出され、 $N2^{\circ}W$ を主軸とする遺構が先行し、その後、 $N8^{\circ}E$ の遺構が出現する。先行する遺構の主軸は正方位に近く、播磨国府との関連が想起される。ただ、出土遺物からはこれらの間に明確な時期差を見出すことは困難で、主軸が変化した意味等は不明である。後者の遺構のうち3-SD03と3-SD94は並行し、一直線に延びる様相から街路側溝の可能性を想定した。これらの遺構の主軸である $N8^{\circ}E$ は調査区周辺の江戸時代の町割りの主軸と整合することから、城下町建設に先行する都市軸成立の一点をおさえることができた。合わせて3-SD03から出土した遺物は質・量とも充実していることから当該時期の良好な資料といえる。また、遺構数が増加し、主軸も明確になってくるのは平安時代以降のことで、江戸時代の町割りの軸と同じ $N8^{\circ}E$ への変化は3-SD03の様相から平安時代中期末頃と考えられる。

江戸時代の地誌『村翁夜話集』には調査地に隣接する久長町辺に『枕草子』に描かれた「飾磨の市」があったとの記述がみえる（村翁夜話集刊行会2015）。その信憑性はともかくとして、『枕草子』と同時代の遺構を確認したことにより、播磨国府、国衙の追求は、姫路城城下町跡の下層全域を視野にいれなければならないことが明確になった。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては遺跡内において顕著な活動の痕跡は認められない。16世紀前半に廃絶した区画溝3-SD01を検出したことから、それ以前の室町時代には何らかの区画遺構が当地に存在した可能性が高い。近接する第389次調査地でも当該時期の遺構・遺物を確認していることから周辺には室町時代の生活痕跡が広がっていることが判明した。

第2面では城下町建設直前の様相が明らかとなった。先の3-SD01の廃絶後、一帯は耕作地となり、江戸時代の町割りと同じ方向にその痕跡が展開している。また、2-SD06から出土した文字瓦は国府寺村に「飴」の名を持つ寺院が存在するとした江戸時代の地誌の記述と合致する。具体的な寺院の位置は不明であるが、近世の記録と考古学の成果とが整合しており、より一層、姫路城築城以前の姫路の実態に迫ることのできる貴重な成果といえよう。第2面にあたる中世耕土上面には姫路城下でも検出例の少ない、江戸時代初頭の造成土が確認できた。この造成土の中には布目瓦が含まれていたが、第2面・第3面で出土した布目瓦とは性格を異にしていることを指摘しておきたい。つまり、第2面・第3面で出土した布目瓦も原位置を保っていないという意味では大きく変わらないが、その供給源は近辺に想定できる。これに対して、造成土に含まれる布目瓦の来歴は全く不明であり、これを同列に扱うことはできない。これまで姫路市史等で布目瓦の出土場所やその広がりから播磨国府の範囲を復元するという実証作業が行われてきているが、今後はそうした瓦には後世の二次的な移動によるものが含まれている点を念頭におく必要があることを本調査成果は示している。

第1面では、第389次調査に引き続き、町屋の生業に関する成果を得た。町屋内におけるこれらの遺構の配置は共通し、姫路における醸造遺構の基本構造には共通性が存在することが判明した。図19は江戸時代前半の醸造関連遺構をまとめたもので、西国街道から北へ向かう道路に面した大黒町と下久長町に醸造を生業とする町屋が軒を連ねていた様子がうかがえる。この醸造業は、文献史料との対応から江戸時代前期

に姫路の主要産業とされた酒造業の可能性が高い（三浦1991）。ただそうした場合、伊丹郷町などの上方の酒造遺構（赤松2019）と比べると町屋自体の規模は小さく、各種工程に伴う町屋内における作業場の区別も明確ではないという違いがある。この点は時期的な問題であるのかもしれないが、姫路の酒造業の在り方は、上方の「工場」ではなく、むしろ、「豆腐屋」のような各種工程が近接した家内工業的な生産体制を想定するのが実態に近いのかもしれない。江戸時代後半になると上方の酒造業はますます盛んになっていくのに対して、姫路では大きく減少していく（三浦1991）。その要因の一つとして、こうした遺構配置に起因する構造的な差があった可能性を指摘しておきたい。もちろん、その他にも幕府による酒造統制や商品自体に起因する問題等様々な要因もあったと思われる。こうした近世における酒造業あるいは醸造業は姫路に限らず、龍野、明石、岡山等の城下町でも営まれていた。そうした他都市での遺構検出例が増えれば、上記想定も含め、地方における醸造業の実態に考古学的に迫ることも可能になっていくと思われる。

江戸時代後半には絵図の記載と検出遺構の関係から、調査地は「又十郎持屋敷」「惣左衛門」「甚蔵」らに関わる町屋であることが判明する。生業を明らかにしうる遺物等は見つからなかったが、埴列建物跡や蔵の基礎等の町屋構造に関わる成果を得た。埴列建物跡については、江戸時代後半の事例が増加していることから生業と関連する施設の可能性もあり、今後検討していかなければならない。また、図3に示したように間口に面した建物下から銭貨を多数検出した。出土した銭貨全てが同じ性格をもつ確証はないが、民間習俗として「撒銭」が行われていた可能性を示している。

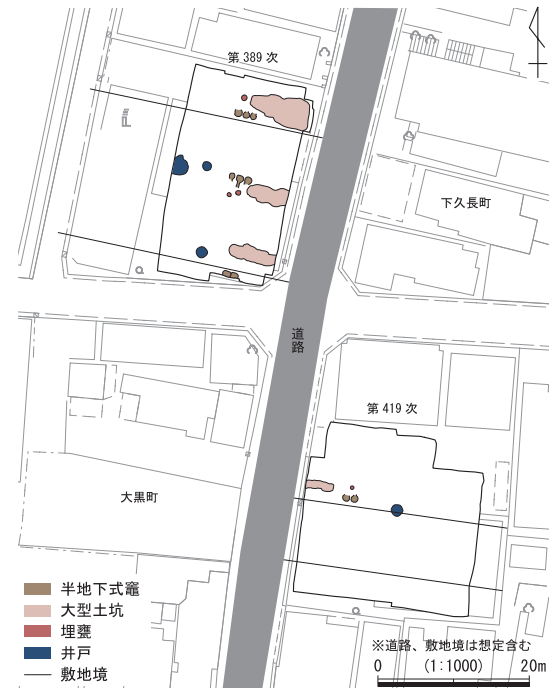


図19 醸造関連遺構配置図

引用・参考文献

- 赤松和佳 2019 「近世酒造遺構の特徴-酒の町 伊丹郷町を事例に-」『近世の酒と宴』『近世考古学の提唱』50周年記念研究大会実行委員会
- 今里幾次 2010 「見野廃寺」『姫路市史』第7巻下
- 木下正史 1984 「駅路との関係を主とする播磨国府跡の想定」『本町遺跡』
- 坂田大爾 1999 「播磨における西大寺律宗の展開」『歴史と神戸』38-1・2
- 『村翁夜話集』刊行会 2015 『播磨の地誌 福本勇次著 村翁夜話集』
- 橋本政次 1957 『播磨考』播磨史籍刊行会
- 姫路市教育委員会 1984 『本町遺跡』
- 姫路市史編集専門委員会 1991 『姫路市史』第3巻 本編 近世1付図
- 姫路市史編集専門委員会 1996 『姫路市史』第11巻上 史料編近世2
- 姫路市埋蔵文化財センター 2017 『姫路城城下町跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第43集
2020 『姫路城城下町跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第93集
2021 『市之郷遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第111集
- 平田博幸 2018 「本町遺跡を考える」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第11号
- 三浦俊明 1991 「町人の成長と商工業の展開」『姫路市史』第3巻 本編 近世1



調査地上空より姫路城大天守を望む



調査地上空より播磨国総社を望む



昭和33年空中写真(姫路市撮影)



調査区西壁土層断面(東から)



第1面オルソ



町屋1・2 建物礎石(東から)



埴列建物跡 2(北から)



半地下式竈(北から)



大型土坑(1-SK30)(北から)



第2面オルソ



調査区西部全景(北から)



2-SD06 石組み(南から)



敷地境と耕作痕跡(南西から)



布掘基礎(北東から)



第3面オルソ



調査区西部全景(北から)



3-SD01 石列(南西から)



3-SD03 上面遺物出土状況(北から)



3-SX95・96(東から)



3-SD03 出土土器



19



81



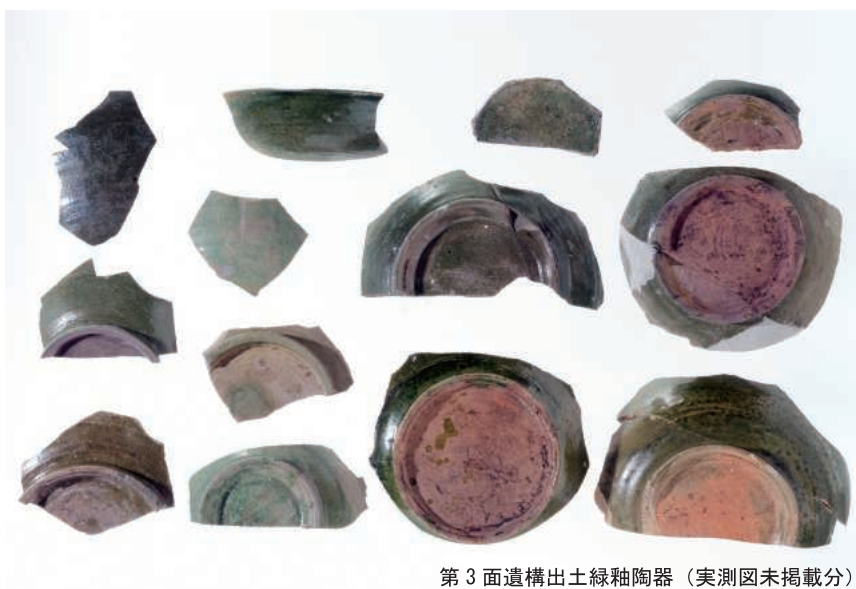
第3面遺構出土緑釉陶器



106



107



第3面遺構出土緑釉陶器 (実測図未掲載分)

報告書抄録

ふりがな	ひめじょうじょうかまちあと								
書名	姫路城城下町跡								
副書名	姫路城跡第419次発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第106集								
編著者名	中川 猛								
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター								
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1								
発行年月日	令和3年(2021年)3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
		市町村	遺跡番号						
ひめじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひめじしだいこく 姫路市大黒 いちちようまち 壹丁町83番	28201	020169	34° 50′ 05″	134° 41′ 58″	2019.4.23 ～ 2019.9.27	533 m ²	集合住宅建設	2019 0042
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物			
姫路城城下町跡	集落跡	古代 中世 近世	柱穴・溝 区画溝・柱穴、水路、畦畔 敷地境、半地下式竈、大型土坑、布掘基礎、埴列建物、井戸			須恵器・土師器・緑釉陶器 ・瓦 陶磁器・土師器・銭貨			
要約	<p>姫路城の東部外曲輪にある「大黒町」において面的な調査を行った。遺構面は3面あり、第1面では建物礎石と半地下式竈、大型土坑、蔵の基礎とみられる布掘基礎、埴列建物跡を確認した。第2面では城下町建設以前の耕作痕跡と石組み溝を検出した。第3面では室町時代の区画溝、平安時代の道路側溝の可能性を有す2条の溝、奈良時代の土坑、溝などを検出した。本調査区からは緑釉陶器がまとまって出土し、その遺存状態も良好であり、近辺にそうした文物を使用する階層が居住していたことを示している。また、調査地は江戸時代以前には「国府寺村」と呼ばれており、その名に示す「国府寺」に縁のある文字瓦が出土した。播磨国府・国衙の広がり、中世「国府寺村」、城下町建設以前、城下町建設段階、町屋の生業等に関する様々な成果を得ることができた。</p>								

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第106集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第419次発掘調査報告書—
令和3年(2021年)年3月31日 発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2